研究ノート

歴史は、いのちの反発と和合によって動く

永安　幸正

目　次

一　歴史は、利己と利他との鬩ぎ合いのゲーム
〈資料〉国際連合教育科学文化機関憲章（ユネスコ憲章）前文
二　争いを減らすために、まず所有権と正義のルールを
三　異なる民族は棲み分けるのもまた一計
四　隣人愛を近親から異邦人へと広げる
五　人類の歴史は、男と女が創造す
六　男女補完、ジェンダーを活かす
〈資料〉マザー・テレサのメッセージ（第四回国連世界女性会議、於北京）
七　老いの扶養の歴史を考える―人生百年説―

一　歴史は、利己と利他との鬩ぎ合いのゲーム

自然界には、プラスとマイナスの電極があり、磁石ではプラス同士、マイナス同士反発して運動が起こり、遂にプラスとマイナスという反対同士が引き合って調和する。

そう考えれば、人間のいのちも、実は宇宙自然のいのちの部品としての役割を担っているのであって、プラスとマイナスの作用、反作用を経て、それが辛うじてバランスし和合する。そのとき、共生の状態が達成されるわけである。

しかし、人類は、何かというと戦争をする。あるいは、戦争とまでは行かないにせよ、しきりに差別やいじめの行動に走る。一方を愛するから他方を憎むということがあり、古来、兵法にいうように、敵の敵は味方であり、遠交近攻、となる。

遠交近攻とは、実は孫子自身の言葉ではなく、『史記』に出てくるもので、隣国は攻め、遠い国とは仲良く交わる、という

意味であり、敵の敵は味方、というのも同様の関係である。

人類の歴史には、たえず愛と憎しみという反対感情が現れる。どこの国にいっても、またいつの時代にあっても、愛があり憎しみが現れるのである。人間のいのちには、そういう利己心と利他心という相反した性質が生まれつき埋め込まれているようである。

争い関係の根本は、人類の心が争いを生み出すような性質を秘めていることにあろう。

考えてみれば、相手が悪い、憎い、嫌い、あるいは相手から何か盗ってやろうという心がなければ、一切の争いごとは起こらない筈である。根は心に潜んでいる。

国連の専門機関の一つであるユネスコ（UNESCO、国連教育科学文化機構）の憲章には、次のように、「戦争は人の心から生まれる」という見方が述べられている。

〈資料〉国際連合教育科学文化機関憲章（ユネスコ憲章）前文

この憲章の当事国政府は、その国民に代わって次のとおり宣言する。

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。

文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である。**政府の政治的及び経済的取り決めのみに基づく平和**は、世界の諸人民の、一致した、しかも永続する誠実な支持を確保できる平和ではない。よって**平和は、失われないためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない。**

これらの理由によって、この憲章の当事国は、すべての人に**教育**の充分で平等な機会が与えられ、客観的真理が拘束を受けずに探究され、且つ、**思想と知識**が自由に交換されるべきことを信じて、その国民の間における**伝達の方法**を発展させ及び増加させること並びに相互に理解し及び相互の生

活を一層真実に一層完全に知るためにこの伝達の方法を用いることに一致し及び決意している。

その結果、当事国は、世界の諸人民の教育、科学及び文化上の関係を通じて、国際連合の設立の目的であり、且つその憲章が宣言している**国際平和と人類の共通の福祉という目的**を促進するために、ここに国際連合教育科学文化機関を創設する。

（社団法人日本ユネスコ協会連盟　http://www.unesco.jp/contents/about/kenshou.html〔ママ〕　二〇〇四年三月十二日、一部ルビ、ゴチ永安）

この憲章の起草に加わった一人、ロンドン大学教育学部の教授、ジョセフ・ラワリーズ博士（一九〇二～一九八一）は、一九七〇年代にしばしば日本に来て研究会を催されたが、「戦争は人の心から生まれる」ということを力説されたのを私も覚えている。

当時私は、正直に言ってこの意味が実感できなかったものだが、それから三十年が過ぎ二十一世紀となって、やはり「それは真実である」という結論に達している。

歴史は圧倒的な材料でもって、私のような鈍感な頭脳の持ち主でさえも、辛抱強く教育する力を秘めているもののようだ。

もっとも、この憲章も国連――戦勝連合国――の一機関であるユネスコのものであってみれば、当時の連合国側のイデオロギーの欠陥が露呈していることを読みすごしてはならない。すなわち、暗に日本もドイツもイタリアも一緒くたにして「人間と人種の不平等という教義」をもっていたと決めつけているが、ドイツやイタリアはいざ知らず、日本は人種差別をこそ批判して国際連盟の規約に法文をつけたのに、欧米こそは白人優位の人種差別主義の旗を降ろさなかったのであった。この人種差別主義の点では、ドイツ、イタリアはじめ、また国連国の白人国家はみな、同罪なのであった。まず教育を受けるべきは白人国家であった。この点を付言しておきたい。

また、すべての「争い」が不必要な悪とはいえないだろう。必要悪というものもある。なぜなら、「争いを解決するための争い」は不可欠だからである。すべての争いは悪で不必要だというのは、神ならぬ人類として、歴史の現実を無視する空想そのものである。

この必要悪としての「争い」とは、自衛と制裁の行動であって、武力の行使から仲間外れや貿易封鎖などの手段による制裁までを含み、お互いが力を合わせて「いのちの不当な破壊」を抑える実力行使である。

現代では、原則として国連の基準に照らし、侵略国家やテ

ロ支援国家に対しては、国連として制裁を行い、武器弾薬の輸出入を封鎖し、ときには軍事施設を攻撃し破壊することもあるのである。

もちろん、国連で合意する以前にさえ、個々の国家は自然権として正当防衛を行う権利を所有する。個人もそういう正当防衛の権利を――行使の方法は国によって異なる――神から、国家から、与えられていると考えてよい。

ともかく、連鎖反応的に「不当な争いを生み出す」元となる争いは困ったことなので、地球上からそういう不当な争いは無くさねばならぬ。だから、不当な争いを根絶するための実力行使は、必要であり、許されるのではないだろうか。

周知のように、現在の国連は改革しなければならない状態にある。国連も一九四〇年代半ばに、人類史の歴史のある特定の段階に生まれたものであるから、長所と共に欠点を持っている。それを改革することも、重要な人類史の創造である。

国連とは、連合国（united nations）――戦勝国――の組織であり、憲章がドイツ、イタリア、日本など第二次世界大戦の敗戦国を敵国と定め、大国であっても日本とかドイツは安全保障理事会において常任理事国になることから外されている。安保理は、米、露、英、仏、中のみが拒否権を有するという非民主的組織である。また総会では、どんな小さな国でも、一票を投ずる資格がある。人口三百万のシンガポールも、人口十億のインドも同じく一票を行使する。果して、これは公平であるか。

日本の国内でもそうだが、いったんできた組織は、それに欠陥があってもどうにか動いているときは誰も改革を実行しようとはせず、ついに動かなくなるときには、その組織は瓦解し消え去るのである。そこまで行き着かないと、全く新しい組織を作るのは、なかなか難しいものだ。人類という動物の組織の宿命であろうか。

現在の国連は、世界世論の形成機関としても、平和維持行動の機関としても、唯一のものではない。国連安保理事会が奇妙な行動をとることは枚挙に暇がない。一九九八年八月、北朝鮮がテポドンを発射したとき、日本政府が安保理事会に北朝鮮非難決議を出すよう働きかけたが、何と常任理事国たる中国が強い抵抗を示した。

二〇〇三年四月の「人権委員会」で、日本は北朝鮮の日本人拉致を含む人権弾圧への非難決議を行うよう希望したが、中国やベトナムなど十カ国が反対し、インドやパキスタンなど十四カ国が棄権したと報道されている。（産経新聞、連載「国連再考」四三、二〇〇三年十一月二十四日号）

しかし、それでもわが日本は、忍耐強く寛大な精神をもって、国連を軽視せず、国際世論形成の一つの場として、他の機関とともに、十分に活用する努力を続けなければならないと思う。中国やベトナム、インドやパキスタンには、貸しを作る位に大きく構えなさい。それが練達の外交というものではないか。日本の国連代表部と大使たちよ、そういう精神となり、地道な努力を払っていかなければならないのである。

孤立しても食って行けるアメリカの真似を、日本はしてはなるまい。日米は同盟関係にあるとは言え、金魚と金魚の糞の関係であってはならぬ。いな、糞であっては日本の自立はあり得ない。

日本は「連帯を求めて孤立を恐れず」――一九六〇年代ころの学生運動の合言葉――ではなく、国家としては、「孤立に走らず連帯を求む」なのである。

日本人の心情としては、パッと孤立的行動に突き進むという傾向があるが、よもや一九三〇年代の「国際連盟脱退」の轍を踏んではならぬ。歴史の教訓を忘れてはいけない。これが、小さな日本列島上の歴史にとどまらず、世界の歴史を作るときの落ち着いた呼吸法なのである、われわれは息を長く、視野を広く保たねばならないのである。

さて、先に紹介したように、歴史上には一方で、「身を殺して仁をなす」という美談が少なくない。これは、すでに説明したエコロジーから見れば、相手に無償で善を与える「片利共生」の究極的な例である。しかし、他方で「他を殺して我が身を生かす」というおぞましい事件も、毎日の新聞やテレビを賑わす。決して、わが身を生かすことにならぬというのに。

「子を知るは親にしくはなし」といわれるように、親には子供は誰よりも可愛い。しかし、母親が「自分のおなかを痛めた子供」を殺すという事件さえも起きる。それは人間のいのちを殺して「食う」わけではないが、相手のいのちを殺すという「捕食」の極端な例であり、自分のいのちの目的のために、相手のいのちを手段とし抹殺する、という異常行動なのである。

先に述べた京都帝国大学の学生のように、歴史上、「身を殺して仁をなす」というような美談が美談とされるのは、その行動がどこにでもあるのでなく、稀にしかないからであろう。

実は、両極端の中間にあって、当たり前であり美談でも何でもないように思えるが、改めて考えてみればとても貴重な行為が、われわれの日常生活には存在する。それが親による子育てである。

殆どの親は、「育てたい」と願う「自分の子供のいのち」のためには、犠牲的に見える行動を進んで実行する。それは、恐らくそういう利他的な行動をすることを親自身の満足と受け止めるような感情の仕組みが、われわれ人間の遺伝子と頭脳の中に生まれつき（？）インプットされているからではないか。

本能的に、「子供を益することが自分を益することになる」と感ずる仕組みが親にあるからではないか。利他すなわち利己、と。これを己利という。これはすでに説明したエコロジーにいう「片利共生」が一転して「相利共生」になることの例であろう。

嬰児を抱える母親は、殆ど本能的に、真夜中でも眠い眼をこすりながら起きてきて、腹が空いたと泣く子のために、乳首を児の口に含ませる。これは特に母親の特権というものである。普通、人類の親は、自分がひもじくても、成長する子供に食べ物を先に分け与える。それが正常な親の行いであり親の愛というものであろう。

誰でも、親になり子育てを実際に経験してみれば、こういう苦労から生じる喜びの味が分かるようになる筈である。親は、自分のいのちの分身を育てるときには、自分のいのちを削ることも敢て厭わない。それが親というものである。

幼児は、十月十日子宮の中にいて、母の身体のリズムを感じ取り、この世に生まれ出てきたので、母の胸に抱かれて母の心臓の音を聞けば、最も安らぐことができるという。ここでは、残念ながら父親は絶対に母親の代りをすることはできない。それは「主夫」の手の届かぬところ。

本来、愛とは「対象と一体化したい」という感情だが、その原形はこの母と子との関係に見出される。

それは、父と子以前である。同じ愛や慈悲を教える宗教でも、「父なる神」と「母なる神」のどちらかで、性質が微妙に異なるのではないか。

昨今、代理母という方法が、不妊を乗り越える方法として、やむを得ず実行されている。卵子と精子は胎児に与えられるが、子宮は「他人」（代理母）のものであり、胎児は代理母の心音を聞いて育つから、生まれてのちの幼児が「育ての親」たる実母の心音に違和感を覚える、ということがなければよいのだが……。

反対に、いのちには悲しい関係も起きる。

大泥棒の石川五右衛門は、捕まって処刑されるとき、その子供とともに油の入った鉄製の五右衛門風呂に入れられ、釜ゆで

にされた。だんだん油が熱くなり、五右衛門は途中までは両手で子供を上に差しあげてゆでられないようにしていたが、ついに五右衛門は、自分が耐え切れなくなって子供を足の下に敷いたそうだ。真偽の程は知らないが、一体、どういうことであろうか。

極限では、人類はどのように行動するものか。やはり我が身可愛いさか。内縁の男に狂い、実子殺しという子殺しの罪を犯すのも人類なのである。

しかし、他人の子さえ育てることが出来るのも、また人類である。少しは、狼などもそういうことをするようだ。

だから、「出来る」のに子育てを嫌って行わない人は――出家は別として――愛情を実感する親となる特権を放棄する悲しき人である。いのちの歴史から見れば、愛のよろこびを味わいなさいという天地自然・神仏からのせっかくの恵みを拒絶する人であり、まことに惜しい限りではないだろうか。今日の個人主義からすると、それも個人の選択の自由ではあろうが……。

どうも、今日の人類社会では、いのちの共同体の歯車がかみ合わなくなりつつあるのではないだろうか。

ともかく、人類の歴史の基本は、無償の扶助という愛に満ちた子育ての歴史なのである。歴史は、間引きと堕胎の歴史ばかりではない。いのちの繋がりなのであり、愛育なのである。われわれは、この真実をじっくりと考えてみたい。

二　争いを減らすために、まず所有権と正義のルールを

だが、家族の中にさえ争いは起きる。すべての争いの始まりは家族・家庭にあるとすらいえる。そこで、歴史の現実に足を踏まえて、いのちの争いを解決する知恵と戦略を探ろう。

まず、争いを減らすためには、理想に走る余り、急ぎ過ぎることがあってはならぬ。戦略を立てて、徐々に実行する。時には迅速を旨とするが、ともかく心では、決して焦ってはならぬ。争いはすべて無意味だ、という平和主義の理想にとらわれ過ぎてもならぬ。争いには、しばらく時を与えるのもよいのだ。

歴史というものは、われわれに様々な人間心理を教えるが、特に通俗的心理学の偏りを正してくれる。現代の心理学では、「積極思考」（positive thinking）とか「プラス発想」というものが流行している。私もこのノートの「歴史から、人生心理学を学ぶ」というところでそのことに触れている。

しかし、忘れてならないことは、プラス発想というものは、

決して悲しみとか苦しみとか、普通にプラスの感情と思われないこと、マイナスと思われる考えを、排除するのでは決してないということである。人間界は、プラスの食べ物ばかりを漁り歩いても、所詮無理というもの。次から次へ、来る日も来る日も、こちらでもあちらでも、マイナスもプラスも、ひっきりなしに音連れてくる。全く、絶望のほかない。

そういう一切が、人生において掛けがえのない働きをするということこそ、事実なのではないか。さらにいえば、マイナスがプラスに転じ、プラスがマイナスに転じるのではないだろうか。世の中の争いなども、ある程度までなら、そういう意味付けをすべきものではないか。雨降って地固まるものなのではないか。完全に無風のままに続いていくような人生や社会など、空想にすぎまい。

そうした折りに、歴史は、物事の輪廻転変を長い目で見るようにと、われわれに豊かな素材を示唆し、慰めを提供してくれるのではないか。

本当のプラス発想とは、マイナスをプラスに読み変えようとか、物事の明るい面だけを見て暗い面に目を瞑ろうとか、そんな人間勝手な区別立ての態度を棄てることだ。一切の事象を、出来事を、実相を、まっとうに正受することに他ならないのではないか。科学という営みは、事実を事実として、下手な価値づけをせず、直視させ、人間勝手な読みを捨てさせる点で、ある程度、有益なのである。

恐らく、その上でわれわれは、「もうどうでもよい」、「為るように成れ」、という自棄糞の態度に走らず、出来事の嵐の中を、耐えて歩き通すほかないのであろう。

もちろん、人は理想を持たないと進歩の仕様がない。

しかし、「争いはすべてダメ、和が絶対」という理想に焦って走り過ぎると、理想はかえって達成出来ない。悪くすれば多くの人々が「どうせできっこない」と諦め、われわれ人類の進歩の可能性に対して悲観するようになる。そして「総論賛成、各論尻込み」にとどまることになる。「和を以て貴しとなす」の意味するところを正しくつかみたい。

子供たちの教育にも、この定石は欠かせない。人は、いじめを悪と決めつけ、それを完全に無くすことを「理想」とする。しかし、いじめや争いは、人間界から完全には無くせないものだから、無くすという理想に囚われると、いじめや争いを「隠す」ことになり、かえって目に触れないところで陰湿化させ潜行させることになるのではないか。

子供の自殺などが起こると、学校では、まず決まって管理者は「いじめの問題などありませんでした」という。「無い」のではなく、「見ないようにしたい」という心理が「見えなくさせる」のではないか。おまけに、父兄も社会も、和という理想にとらわれて、教師側を批判するばかりである。

われわれは「心ここにあらしめる」ことが必要であろう。現実というものから、心と目を背けてはなるまい。

いのちの相互作用において、いじめや争いというものは、ある程度まで普通の姿なのである。この事実を前提してかかる方がよいのではないか。前に説明したとおり、地球上の生態系では、いろいろな生命が争いを「普通の行為」として経験するのであって、調和はその中から生まれる。しかも、調和はすぐに崩れ、また争いが始まる……ということの繰り返しなのである。

晴天ばかりを望まず、曇りも嵐もあると考える。そのほうが気が楽であり、危機への対応においても、心の準備ができるのではないか。

われわれは、車の運転に際しても、保険という仕組みを作って保険金を掛ける。事故が起きるのは好ましくないけれども、人類社会の設計では、ある程度、事故の発生は避けられないものだという前提に立つべきである。個人のモラルでも、すぐさま「完璧性」を求め過ぎないようにしたい。このように人類社会では、「未完の完全性」とでもいう考え方を前提とするのが良いのではなかろうか。

ここから、「ルールの柔らかさ」という考えが必要となる。

人類社会でも国家社会でも、その制度上の枠組みを作り上げるとき、法というものが不可欠の役割を引き受ける。その法のまわりに、文化とか慣習というような歴史の中で発達してきた要素が、鉄筋を包むクッションのように存在し働く。社会のルールというものは、法と慣習文化とからなる。そのルールというものには、柔軟性が必要である。

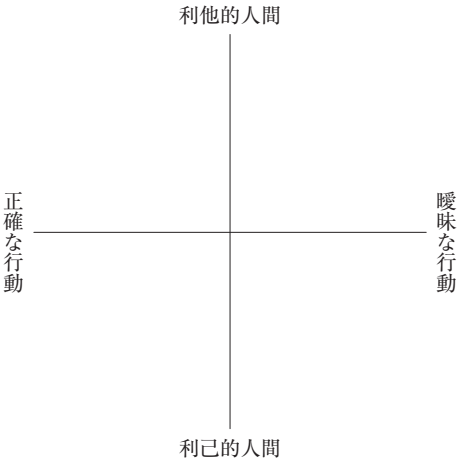
例えば、交通ルールのことを例にして考えてみよう。ルールを作るときには、三種類のドライバーがいるということを前提にしなければならない。

第一は、運転技術は優秀で、法律違反なども決してしないドライバー。

第二は、軽い違反はするが、概ね忠実な運転に心掛け、技術もまあまあのところ。

第三は、飲酒運転、駐車違反、スピード違反、隙あらばありとあらゆる悪行も平気の平衛門、と言わんばかりのドライバー。

世の中には、こういう三種類の人種が住んでいる。ルールというものは、すべてこの第三種類の人間を取り締まるように作るのである。これをもっと詳しく述べると、こういうことになる。社会の人間については、(1)正確さや曖昧(あいまい)さ、(2)利己的か利他的か、という二つの座標軸を考えに入れなければならない。正確な行動という点からみると、人間は機械ではないので、あまり厳格なルールは守れない。また、自分の利益を全く考えない完全に利他的な行動は取れない。基本は、自分可愛さで行動するものである。



道路で中央分離のラインを向こう側に乗り越えて行かないように運転するのは、事故を起こさないようにしたい、自分が可愛い、からであろう。

正確さという角度を強調し過ぎ、利他的で最優秀の運転手ばかりである、というように理想的な社会を前提してルールを拵(こしら)えると、そうしたルールは守られないし、かえって事故を多くする。ハードな設備である道路の作り方でも同様であり、F1ドライバーのような運転手を前提するルールでは、かえって事故多発のルールとなろう。鉄道の運行時刻でも、あまりに厳密で正確さを強調し過ぎると、事故が多くなる。過密ダイヤで人間に過重な負担を強いる交通システムは危ない。人間には、寛大さとゆとりが必要である。文明では「適度さ」(propriety)というものに注目したい。

社会も個人も、「社会の仕組み」と「個人の人生観」に、ある程度の「ゆとり」や「曖昧さ」(ファジーネス)や「未完性」の哲学を組み込んだほうがよいのではないか。――「いい」加減でなく「よい」加減として。歴史は、先人が社会の安全を図(はか)るためにどんな工夫をしてきたかを物語っていて、まさしく「安全学」のテキストにほかならぬ。

われわれ人類は、自分個人の、社会の、完璧(かんぺき)な理想を求めて

息まない。個人としても、理想の人格、理想の人徳を求める。学問も、思想も、宗教も、道徳論も、社会改革運動もすべてみな、一点の曇りなき理想社会を実現しようとする傾向がある。しかし、この完全理想主義は物事の理、人間性の能力の実情を、よく踏まえてはおらず、科学的でないから、どうしても無理を生じさせる。

そうした理想主義に引っ張られた行動が、かえって問題を生み出す。

この点は、われわれの思想的先達の巨人である、江戸時代の本居宣長先生（一七三〇～一八〇一）が注告しているところである。

天地の間におのずからあることお、人の身のうえのことも、なすわざも、「ことごとく神の御霊」による「神のはからひ」なのであり、神には「尊卑善悪邪正様々」あり、世の中には吉事善事のみでなく、悪事凶事も交じるのであって、ただしく道理に合うことのみが起こるのではない。

それだから、「此道理をしらずして、惣體の人を、きびしくをしへてたてて、悉にすぐれたる善人ばかりになさんとする」は、……「これたとへば、一年の間を、いつも三四月ごろのごとく、和煖にのみあらせんとするがごとし。」

（本居宣長『玉くしげ』筑摩書房、三一五、三一三ページ）

ここにいう神とは、一神なのか多神なのか、定かでないが、その「はからひ」（働き）は様々である、と。なんと味わいの深い人間観であり歴史観――多神教に立つ――ではないか。これが「もののあはれ」ということか。

歴史においては、理想も、それを実現する方法も、個人の自由主義も、平和論も、あらゆる革命論も、社会主義も、そのほかの改革論も、特別革命が必要な緊急事態は除き、原則として、このような善悪混合・寛大・漸進ということを、悟るべきであろう。人間は、そしてその社会は、完全主義では立ち行かない。

私は、争いやいじめを薦めるわけではないが、もっとあっけらかんとした現実主義で受け止めたいもの、と言うのである。

人類世界には歴史上、戦争やいじめは起きるものだと考え、それが「破滅」に到らないようにするため、戦争法規などを工夫して作ってきたのではないか。自衛のための軍備も、国連の多国籍軍も、各家庭の戸締まりも、交番も、みなそのための工夫といえよう。

どうしても争いを好むのが人類という動物なのであるから、理想に走らず、次善の策として、いろいろな工夫を凝らすのが

成熟した大人の知恵というものではないか。歴史を振り返ると、すでに先人が試したいくつかの「次善の策」（the second best）が見出されるのである。

その第一は所有権を確立し、正義のルールを実行することである。

人類の歴史とは、所有（権）の発展の歴史である。つまり境界線を引き、各人の自由に使ってよい空間を自他の間で区別するのである。土地を借りて使うというような利用権とか使用権を設定するなどの方法も、これに属する。争いを乗り越える基本は、所有権を定め、正義を確保することにある。

古代ギリシアのプラトンが言ったように、**正義とは各人に各人のものを**ということであり、自分と他人との間に「線を引くこと」なのである。老いて去りゆく親のつとめの一つは、子供たちが争わないように、遺産について、「各人に各人のものを」確定しておくことにある。

日本の歴史には、これについて、どのような実例があるであろうか。

皇室の政府を朝廷と呼んだが、朝廷は日本列島各地に地方政庁として国府を設け、律令制度の下、国郡制を実施した。その基本は開墾した土地を誰が所有し、そこから挙がる収益を誰が、どれだけ手に入れるか、国家への納税をいかに定めるか、にあった。天皇の中央政府は、国民の暮らしの基本枠組みをそのようにして確立したのであった。

人類のあらゆる国家の土台は、**善（財）を生産し分配するためのルール**を確定することにある。古代日本でもまたそうであった。西部劇はアメリカ開拓の「古代」を物語るものだが、そこには境界争いと保安官と裁判所（コート）がつきものであった。

信教の自由というものもこの区分の考え方の産物である。信仰など価値観の所有についても、各人のプライバシー空間を認め、「各人に各人のものを」という正義の原則を貫くことにしたのである。

織田信長（一五三四～一五八二）は石山本願寺を攻撃したりしたが、それはそうした仏教教団が本来の領分を犯して、つまり宗教を出て政治に介入したからである。信長は人々の心の中での信仰の自由までも破壊しようとしたのではなかった。

信長は、意外と進んだ近代的な思想の持ち主であって、個人の自由権をかなり認める態度を示したのであるが、これは作家の伊沢元彦さんが明確に論証しておられるところである。この点は、『逆説の日本史』を参照されたい。

なお、人類の歴史をさかのぼればさかのぼるほど、神話・心実の一部たる怨霊の「たたり」を恐れることが歴史を動かした、という伊沢説は真であろう。――それが転じて、祟る霊力を崇め、その恵みに預って入試に合格したいと祈願することにもなった。天神・菅原道真信仰である。

過去の歴史、過去の先人の行為や生き方を、安易に今日の物差から判断して決めつけ断罪してはいけないが、歴史を貫く法則のあることは見失うべきでない。いつの世も、歴史の推進者とは、人々の自由への希望に応じて、**自由のフロンティアを拡張する人物**だといえよう。信長は欠点多き人物だったが、やはりこの面では歴史を推進するリーダーだった。

こうして、社会の制度の基本は、価値の所有も含めて「自由の分配についての正義」の考え方と、ルールと、それを保証する仕組みを構築することにあるわけである。これが**「政は正なり」**と孔子の言ったことの内実ではないか。

ヨーロッパから大西洋を渡ってアメリカ大陸と先住民の生活を侵略した白人植民者たちの第一の課題は、土地問題であった。先住民を――インディアン（Indian）、つまり印度人と誤って呼び名をつけ――蹴散らかし、騙し、交渉し、売り買いし、あるいは自ら開墾して手に入れた土地を、自分のものとして囲い込むことであった。西部劇を観るとき、至るところに姿を現す柵というものに注目したい。日本の子供たちにも人気のあるテレビドラマの古典、「大草原の小さな家」は、そうした古き良き（？）時代の一コマである

南米大陸の方は、この北米よりもっとはるかに無法であったようであるが……。

アメリカの田舎を旅して、開拓時代から続く古いタウンを訪問すると、**社会の四元素**が見つかる。

①教会　一切の価値のシンボル。

②議事堂　各地方の正義の法、ルールを作る場所。

③市役所　人や住居はじめ、あらゆる持ち物の登録をし、税を集めるところ。

④警察・裁判所　正義の法を執行し、争いを解決するところ。

これらは人類社会のどこでも見出される共通の四元素である。アメリカは、十七～十八世紀にかけて新しく製造された国家だから、変化の小さい地方のタウンには、そういう基礎的な仕組みがまだよく残されているのである。

人類社会の礼節の最少条件は、無危害の原理、つまり他人の空間を犯さない、他人に迷惑をかけない、ということであるが、それは心と体を含めて自分の持ち物と他人の持ち物とを区

別し、尊重し合うことに他ならない。そのことを教育し訓練するのが徳育の基本である。これが、洋の東西を問わず、また時の古今を通じて、共通の「心実」であり価値観なのである。

「人の物を盗ってはなりませんよ」

「人に迷惑を掛けないように」

三　異なる民族は棲み分けるのもまた一計

家族に「スープの冷めない距離」という知恵がある。歴史上、旧ソ連という巨大な国は、本来無理だったのだが、とにもかくにも理想に燃えて造った人造国家であった。内部にたくさんの異なる民族を抱え込んだが、異なる民族は宗教、食物、隣近所との交際方法など、生活習慣が違うから、お互いに争いを起しやすい。

そういうときには、自治区とか共和国といった区分を設けて民族毎に別れて住む。土地が許せば、違う者はお互い離れて暮らすに越したことはない。会うのは市場において、時々の交易においてでよいのである。

その中で隣近所の間は、近からず遠からず、叫ぶと声が届き、挨拶が出来る距離、いわゆる「スープの冷めない距離」くらいが、手頃なのである。

人類が国民として纏まり、国家を国境によって「明確に区分する」ようになったのは、近々三百年くらいのものであろう。それまでは、国境などはっきりしなかったから、暮らしの上での小競り合いも絶えなかった。

国民国家と国境の設定は、一方で、そういう小競り合いを国家の内部において少なくした。しかし他方、総力戦というように、今度は外国に対して、すべての国民を巻き込んだ集団同士がぶつかり合う「国際戦争」を作り出した。……

三国志の頃の国家と戦争は、王室の間のものであり、総力戦ではなかった。

国民という集団を作ると、どうしても内に纏まるが外を排除する国民感情つまりナショナリズムを生み出し、その分、外国に対して排他的な偏見を作り出す。孫子の兵法を持ち出すまでもなく、内を纏めるには、外に敵をこしらえるに限る。外に向けて人々の憎悪を煽り立て、内には愛国心という形でナショナリズム（国民同朋感情）を醸成するのが、政治上、効果的なのである。

ナショナリズムというものは、国民集団の仲間感情だが、他方でそれは外国人・異邦人を蔑む偏見となりやすい。

かといって、ナショナリズムを否定するコスモポリタニズム

は、決して現実的ではない。この点、佐伯啓思『国家についての考察』飛鳥新書、を参照。また、姜尚中『ナショナリズム』岩波書店、なども参照。後者は普遍的な理論でなく、日本の「国体」批判に終始しているのでナショナリズムの特殊論であり、余りにも限定された観点のナショナリズム批判論だが、これも、後学のためには見ておくとよい。いわゆる「在日」の学者（国立大学・東大の教員）のそれである。韓国、北朝鮮、中国のナショナリズムも同じ筆法でとりあげられよう。

人類世界は、歴史上、異なる民族を扱うのに、以下の三つの方法を考え出したのである。

①旧ソ連型

ロシア帝国を倒し、マルクス主義に立ってソ連を作ったレーニン（一八七〇～一九二四）はヴォルガ河近くの生まれだが、その後を襲ったスターリン（一八七九～一九五三）はグルジヤ人であって、支配民族のロシア人というより周辺の少数民族の出自であったから、民族の対立をどうするか悩んだ。二人はともにこう考えた。争いを避ける基本は、異なる民族が接触を避け、区別された空間に分かれて棲むことがよい、と。これは古代ローマ帝国、イスラム帝国など巨大帝国のやり方の二十世紀版であった。

マルクス主義は、プロレタリア国際主義からして、労働者階級と前衛党は国際連帯を図るが、民族政策では、建前上、民族混和でなく、民族自決つまり民族自治、民族分住を掲げる。それでも、マルクス主義も民族対立の問題を解消できなかった。中央アジアの「スタン」という語尾を持つイスラム諸国家は、ロシア帝国の「くびき」から自己を解放せんとしている。

②アメリカ型

アメリカはいくつも国（州、state）が集まって出来た合州国であるが、民族として人間を区別するというより、人間を人種としてとらえ、人種差別なしに、人として、誰がどこにいって住んでもよいという国である。

今日のアメリカは、それでも人種・エスニックグループ毎に分かれる傾向にある。現に南部と西部のヒスパニック地域がそうなりつつある。イスラム系黒人のグループには、「同一性政治」（アイデンティティ・ポリティックス、分団政治）といって、黒人共和国を造るというような運動をしている人たちもいる。

今日のインド国家もアメリカ型だが、イスラム系の隣国パキスタンも絡んで、イスラム群とヒンドゥー群の人々の間に、難

しい対立が潜んでいる。

③中国型

チャイナ（China）では、漢民族が圧倒的に多数であり、全国土を支配する。少数民族はそれぞれの父祖の地に広西とか西藏（チベット）など、自治区というようなものを認められ、分かれて住むが、しかしそこに漢民族がなだれ込み、原住民たちを含み込み同化してしまう傾向にある。すでに共産中国の成立以前に、満州（現在の東北部、満州族の故郷の地）はそうなり、かつての満州族は消えなんとしているという。北方のウルムチ辺りでも、漢民族が大量に流入しイスラム系の人々への圧迫――あるいは開発――が強まっているそうだ。内モンゴルもそうなる。

西方インド亜大陸でも、巨大なヒンドゥー民族つまりヒンドゥー教を信じる民族は、周辺の少数民族に対して圧迫を加えている。ビルマ（ミャンマー）の西隣りのインパール地方では、分離独立への紛争が絶えない。巨大民族とはそういうものなのであり、エコロジー的にいって集団の生命力が旺盛なのだろうか。

④日本列島の場合

日本列島では、先住の縄文人が住み、その中に稲作を得意とする渡来の弥生人が後から割って入って来たらしい。そして、かなりの長い時間をかけて、どうにか仲良く混血するという状況に落ち着いたようである。古典の記紀や風土記に伝えられる「ヤマトタケルノミコト」（倭建命）によるクマソやその他の地方民族の平定物語は、やはり大和朝廷と地方の氏族や部族との間に征服の戦いのあったことを示すものだろう。古代の日本列島上でも、シナ大陸と比べればスケールは全く小さいが、支配的有力民族による他民族の同化が行われたという点では、現代中国と似ているようである。

日本列島上では、国民の形成が最も遅れたのは北海道であるが、その前に七～十一世紀にかけて東北がその主舞台となった。陸奥（ムツ）と出羽（デワ）の国からなる東北地方の統合は、蝦夷（エミシ）――「エゾ」と呼ぶときは、今日の北海道以北の地の人々への呼称であった――と、大和（ヤマト）、関西あるいは関東方面から来た人々との間の統合であり、いくたびの戦と軋轢とを伴ったらしい。

柳田国男先生（一八七五～一九六二）の『遠野物語』で有名な遠野（現在は市）の歴史を綴る『遠野市史』に基づいて、

東北の蝦夷の統合過程を年譜風に描こう。（遠野市『遠野市史』万葉堂書店、第四巻、年表、八三六～八四〇ページ、ルビ追加）

三六七年	蝦夷の勢い盛んとなる。		
五八一	蝦夷反し、陸奥乱れる。		
六四六	東北を一国とし、陸奥国を置く。	大化の改新の詔を発す。	
七〇一	凡海宿禰鹿鎌を陸奥に派遣、地下資源開発を行わせる。	大宝律令成る。	
七〇八	巨勢麻呂を陸奥鎮東将軍に、佐伯石湯を征越後蝦夷将軍に任じる。		
七一二	陸奥の国を分けて陸奥と出羽とする。	『古事記』編纂。	
七一五	関東地方から農民一千戸、陸奥に移住させる。		
七二〇		国家の正史『日本書紀』編纂。	
七二二	諸国の柵戸一千人を、陸奥鎮所に置く。		
七二四	陸奥の国の蝦夷謀反す。陸奥多賀城を築き、奥州に初めて鎮守府を設け、大野東人が将軍として夷民を鎮撫す。		
七四一			国分寺を諸国に、東大寺を奈良に建立。東大寺、大仏造営す。
七四九	陸奥遠田郡黄金迫から黄金を初献上。		
七六一	秋田城を築く。		
七六七	磐井地方を平定、伊治城を築く。		
七六九	伊治城付近に二千五百人を移す。		
七七四	蝦夷の襲撃受け、大伴駿河麻呂ら応戦し平定す。		
七八〇	覚鱉城を築く。陸奥上治郡大領、伊治		

七八一　呰麻呂が謀反し、按察使の紀広純を殺す。按察使、藤原小黒麻呂、蝦夷を平定。

七八八　紀古佐美を征夷大将軍に任じ、衣川まで進出するも、胆沢の蝦夷に敗退。

七九一　大伴弟麻呂・征夷大使・坂上田村麻呂副使。

七九七　坂上田村麻呂、征夷大将軍となる。

八〇一　田村麻呂、胆沢と志和の地方を掃討。

八〇二　田村麻呂、胆沢城を築く。

田村麻呂、夷大墓公（阿弓流為）ら二人の首領を従えて都に帰る。

八〇三　田村麻呂、志和城を築く。

『続日本紀』編纂。

八〇四　田村麻呂、再び征夷大将軍となる。

八一一　田村麻呂、没す、享年五四歳。

陸奥出羽按察使、文室綿麻呂、兵二万六千人を発し、爾薩体・弊伊の蝦夷を征定。

文室綿麻呂、征夷大将軍となる。

右は、主に現在の岩手県、遠野の『遠野市史』によるが、この後暫くして、清原、安倍の両氏による前九年（一〇五一～一〇六二）、後三年（一〇八三～一〇八七）の役が起こり、彼の藤原三代が栄える。平泉の藤原三代とは、安倍時頼の孫の一人で清原氏嫡流の清衡が藤原姓に戻り、平泉に居を構えたところから始まった。奥州藤原三代は、藤原氏系の血を引くいわゆる中臣鎌足に由来し、子孫が日本歴史に大繁盛した。

関東から西の日本では、源平の戦いが始まり、源頼朝による源義経の追討に到って、その余波が、北陸を経て遂に奥州にまで及び、「衣川の戦い」で義経が落命し、藤原三代の

栄華も終焉する。（『遠野市史』第一巻、七四～八〇ページを参照）

日本の国家形成の途上での東北各地にわたる蝦夷との交渉、交戦、平定、そして帰順・恭順、統合の歴史過程は、学校教育で詳しく教えられてはいない。研究と教育とに、今後の努力が求められる。（エミシ観については、熊谷公男『古代の蝦夷と城柵』吉川弘文館、参照）

この古代における蝦夷統合の過程は、地元各地の郷土史を読み比べてみると、しばしば、「大和朝廷が行った非情な帝国主義の古代版」として解釈され語られる傾向がある。当然と言えば当然であるけれども、その理由はむしろ、市町村の郷土史は一九八〇年代くらいまでに編纂されたものが多く、その頃までの歴史論は、マルクス主義の階級闘争史観、唯物史観の暗黙の影響が根強かったからであろう。日本史学界でも、そうした見方を取る中央の学者の史観が多く引用されている。

しかし、皮肉なことに、征服されたとされるエミシの側から見れば、現在そう語る人々の内の少なくない数が、家系を辿れば、実は古代のそうした支配拡大の過程で東北に移住し土着した支配者・侵入者の側の子孫たちということになろう。このことは、忘れてはなるまい。

実証科学と称して、歴史は勝者によって語られ、書かれるというのは、お隣の大陸においてのみではあるまい。

それは、現在の南北アメリカ白人が、あるいはオーストラリア白人が、あるいは漢民族が、あるいは沖縄におけるヤマトンチュウ（本土人）が、自分たちの祖先は原住民を制圧した侵入者である、ということを忘れて、昔の侵入を、他人事のように、語り非難するのに等しいのではないだろうか。だからといって、侵入者の子孫も、祖先の罪を恥じて、いまさらその地を去るわけにも行くまい。白人の、その他の民族の、子孫は、元の地に引き返すことはできないのである。

歴史は、些か皮肉で、苦しい課題を、われわれに遺すものではある。

歴史には、忘却と許しと和解が求められるのではないか。世界各地でそうなのだが、歴史の研究も学習も、あまりにも古来の事を引き出し、それと現在と結び付けて、人間の責任と罪をあげつらい、恨みを煽り立てるのは、程度物ではないか。

パレスチナの地では、「ここはわれわれの地だ」と争いが絶えぬけれども、先に住んでいたのはユダヤ教とキリスト教とイスラム教のどちらの人々が先か後か、と論争し責任のぬすり合いをしている。それでは、問題の因果関係を広げ過ぎて、今の

現実問題を拗らせ、解決から遠ざける効果をもつのではないだろうか。

郷土史に限らず、歴史編纂では、まず性急な価値判断抜きにして、事実を記録し、過去向きというより未来志向の価値判断を少しだけ、隠し味として加えるものとすればいかがであろうか。皆さんはどう判断されますか。

さて、このように、**分れて住む**か、混じって住むか、いずれかになった上で、人類社会で次に発達するのは**売り買いの方法**である。

天地自然が人類に与えた食料など生活手段の原料には、所により量が不足したり、種類にも偏りがあるから、そこに売り買いによって「有無相通じる」という方法が発達した。

日本歴史の文献についての最大の百科事典である『古事類苑』によると、商いは「あきさく」といって、秋の稔りを交易することを意味した。「腕づく」「武力による略奪」という弱肉強食の解決法を避け、商いは、人のいのちを傷つけることなく、平和的な方法に変えるのである。（この点、永安幸正『経済学のコスモロジー』新評論、参照。）

商いの仕組みが発達すれば市場となるが、古代から市場は世界中へと広がり、戦争の代わりに平和を普及させた。

かつて匈奴による略奪を防ぐために設けられた「万里の長城」なども、商いが発達すると、もはや無用の長物となる。現に現代中国では、長城は補修されずあちこちで崩れかけている。修復する所は、北京近郊の八達嶺がそうであるように、観光名所として使うための部分だけである。

大地に線を引き、外と内とを分けるのがつまり城壁を造るという方法だが、その目的が、昔の略奪戦争の防止でなく、現代の観光つまり光を観て楽しむ、という平和目的へと進化したわけである。

ところが、二十世紀の前半一九三〇年代に、人類は「ブロック経済」という敵対する圏域を作った。イギリスのスターリング・ブロック、フランスのフラン・ブロックなどである。

その結果、貿易の台頭著しい日本は、ＡＢＣＤラインという欧米の包囲網によって締め上げられ、それを打開するためもあって、ついに日米戦争に突入せざるを得なかった。当時の日本の対外膨張とそれに対する欧米列強の反応ぶりは、陸軍省新聞班『躍進日本と列強の重圧』（昭和九年七月）を参照するとよい。

人類世界はＷＴＯ（世界貿易機関）というような売り買い方式のルールや機構をつくる。その目的は、売り買いの方法によって争いを避けることにある。いのちに必要な手段や物資を、戦争でなく、売り買いを通じて平和的に手に入れる狙いからである。

これは言い換えるなら、抜き差しならないように思える善悪の争いを「損得の計算」に変換し、取引を通じて争いを回避しようとするわけである。（竹内靖雄『経済倫理学のすすめ』中公新書、の秀抜な見識を参照されたい。）

売り買いの方法によると、人々の間の宗教の違いさえも、ある程度は乗り踰えることができる。

例えば、古今と東西南北の文明が出合うトルコの大都会、イスタンブールのグランバザールを訪ねるとよい。あの戒律厳しいイスラムを含めて、異なる宗教の違いに関係なく、お金さえ出せば、誰とでも売り買いができることを経験されるであろう。お金は、人々に宗教の違いさえもを乗り越えさせる。

しかし、である。ブルーモスクなどイスラム教の寺院に入って、見学だけならよいが、礼拝でもしようとするものなら、「あなたは信者ではないのですから、礼拝してはいけません」と厳格に注意される。私はそのように注意された。宗教は前面に出ないだけで、人々の心の中では強く生きて働いているのである。

今後、人類は、宗教というものを前面に出して争うことをせず、信仰は各人の心の内に秘めて行くことにする。宗教は、潜在化、内面化させる方が良かろう。そして、世俗の生活でのお互いの交わりには、「道徳」「倫理」という次元で折れ合いながら和合し、平和的に生活し共存することが求められるのではないか。

孔子が「われ怪力乱神を語らず」と述べたことは諄とすべし。偉大なる智恵ではないか。

四　隣人愛を近親から異邦人へと広げる

古来、人間の性質を巡っては、性善か性悪かと見解の対立がある。しかし、もう一つ、強いか弱いかの区別もある。人類という動物は、その性質が弱い、つまり**性弱**である。イスラム教ではこの点を強調する。

人類は他の動物と較べて、特別、仲間内での争いを好む動物だというわけでもなかろうが、十分なセルフコントロールができるほどに意志が強い、とはいえないようだ。食欲一つ、仲々コントロールできない。

特に集団で行動する場合には、大量の殺し合いに突入しやすいから、人類は集団として、これからもっと賢い頭脳情報を発達させるべきだといえるだろう。

前に述べた子育ての問題について再び考えてみよう。

地球上のいのちの種類は、高等なものへと発達すればするほど、生まれてくる子供は未熟児であるという。その最たる場合が人類であり、人類の赤ん坊が一番弱い状態で生まれるようだ。だから、親による保護、無償の犠牲的行動がそれだけ多く必要であり、幼いいのちを守って育てあげるという保護行動が親に求められる。かくして、人間の赤ん坊が一番手がかかることになる。

ここが肝心である。つまり、そうした犠牲的な行動を行うことができるような心を持った親ほど、自分の跡継ぎのいのちを多く残せるのではないか。子殺しや児童虐待をするような変な頭脳情報を持った親は、自分の子孫へと、いのちを続けることが難しいのではないか。

結局、人類社会としては、愛育の行動をより良く行うような文化遺伝子を保有する親が、そうでない親よりも、より多く子孫を残すことになるのではないか。

一族の栄枯盛衰にも法則があるようだ。

東北地方の名族で、仙台の伊達一族と並んで力のあった最上一族は、亡んでしまった。政宗の母は最上の出である。それは一族間の仲が悪かったからだと言われる。片や源氏の流れを汲む常盤国の名族、佐竹一族は、後に秋田に移されたが、北条、武田、上杉に挟まれても、よく命脈を保ったが、調べてみるとたしかに親族の間の仲が良かったようである。

人類の歴史は長いが、それでも発生以来わずか数百万年かそこらでしかない。とはいえ、すでに現代までの進化の過程において、親の献身という犠牲的行動へと向かわせる「モラル情報」が、人類集団の頭脳に多量に貯えられ、定着し、遺伝的にさえなったといえるのではないか。

これまで歴史は、母親の育児行動において、いのちの争いを回避し、いのちを健やかに平和的に生きるガイドラインを、かなり豊かに開示しているのではないだろうか。

そのガイドラインの最良のものは何だろうか。隣人愛とかお布施などといって、献身に基づく共生の作法がそれである。しかし、それには、どうも順序があるのではないかと思われる。「近きから遠きへ」という順序がそれではないか。

同じようにお腹が空いて泣いている子供があって、一人は自分の子供であり、もう一人は他人の子供であるという場合、親はまず自分の肉身の子供に目を向けるのである。血を分けた子供に向ける。いろいろな家族が混雑して住まう難民キャンプでも、ほとんどは家族毎で纏まって暮らし、乏しいながらも食物を分け合って食べている。身近な者同士から、というのはケア（世話）の原型ではないか。

もちろん、たまには他の家族や身寄りのない子供を招き入れて食事をするが、しかし、いのちのケアの原型は「家族で纏まって助け合う」ということなのであろう。近きより遠くへ、親から疎へ、というのが現実であり自然なのではないか。

家族をつくらない他の動物はともかく、人類にとって、自然であるのは、まずは家族単位に纏まっていのちを養い、相互に扶け合う。そして、子供は独り立ちできるように生長すると独立する、ということであろう。

ただ、現代のような「勤め人」をつくる資本主義社会となれば、家族が家業として同じ一つの仕事をする、代々、それを続けるという家族型自営業は減ってくる。「仕事共同体としての家」は少数派へと転落し、多数派のいのちの共生の姿ではなくなった。多数派は「会社」となる。

それでも、いのちの共同体としての家族の原型が消えたわけではないが、これからは何を絆として纏まるのか。代々、家系としての家族の系列を考えて纏まり続けるということは、消えてしまうのか。

家族とか、他人同士でも数少ない友の間では、扶け合いは成り立つ。しかし、グローバル時代とはいっても、人類の精神の発達段階はまだ低いから、肉親や親しい友人を離れて、完全な平等愛とか、「身を殺して仁をなす」というのは、実行が非常に難しい。人類のいのちの行動を指令する脳には、自分の「身を殺す」というような無償の愛の行動を促進する情報は、まだ十分にインプットされていないのではないか。

だから、現在の人類の脳の発達段階では、努力しなくてはならぬが、無理をしてはいけない。親疎の区別を一切無くし、家族や国家などを消し去ろうとするのは、一見崇高なる理想のようであるが、一部の人たちの気分にもよるものだ。いきなり無くそうとするのはやはり空想であって、困難なのではないか。

ところで、しばしば「争いや差別は偏見から起こる」といわれるが、これは事態の一部分しか物語っていないのではないか。

偏見という以前に、むしろ事実上の利害と価値観の対立が、争いの真の原因になることが多い。価値観すべてが偏見であり誤解であるのではない。偏見とは全見ではないということで

あって、偏見とは不十分な情報による判断を指す。「一目ぼれ」がそうである。その悲哀の経験は青年のテストだろう。

だから「事実的な利害と価値観の対立」を、こうした「不十分なあるいは不完全な情報に基づく偏見や誤解」と、一緒くたにして片付けてはならないだろう。

この種の偏見は、情報の不足をなくし、知識を得れば解消されてなくなる。

例えば、子供たちが、夕方、下駄を足で放りあげて「あーした　てんきに　ナーレ」と言って、明日晴れになるか雨が降るかを占う。科学的な情報に基づいて行われる天気予報に比べると、この下駄式予想では情報が不足するから、当たる確率は五十パーセント――以下ではなかろうが――仲々、以上にはならない。

いくら、子供たちが、「表が出たから晴れになるよ、この前も晴れになったからね」と信じ込んでいても、それは当てにならぬ偏見に過ぎない。それは、不十分な情報に基づく信じ込みであり、晴れと予想して遠足に行くと、雨に降られてずぶ濡れになるかも知れない。

そこで、大人が、科学的に確かな情報を提供すれば、子供たちは自分の「信じ込み」つまり偏見をすぐに修正するに違いない。

また、この地球上には、「われわれは、世界で一番優秀な人種である、だから世界を支配し、何々人を根絶やしにする使命を、われわれの信ずる神から与えられているのである」といった恐ろしい考えを持つ民族もいた。これは容易に変更できない考えであろう。しかし、情報の不足とか不完全さを基にする考え方であり、不完全な情報でありながら、そこから都合のよい結論を引き出しているものであろう。

長い歴史の流れの中で、「成程、われわれが一番優秀とは言えぬ」と思い知らされれば、やがて自惚れを改めるであろう。

逆に、劣等感に取り憑かれた者でも、色々な経験を重ねると、少しずつ、自信を得て行くであろう。これらは、修正可能な偏見といえる。

ところが、「人は皆、死んだら地獄か極楽かに行く、必ずそのどちらかだ」という信念（ビリーフ、心実）を信じ込んでいる人にとっては、いくら科学的で十分な情報を提供してあげても、ご自身のその信念を他人が変更させることは難しい。いや、そういうものについては、科学は何も知ることはできないのだ。

このような地獄極楽の信念は、情報不足に基づく偏見ではない。これは、死ななければ直らない信念である。いや、死んで

も直らないだろう。他人が「それは狂信だ」といくら言っても、ご本人にとっては狂信でも何でもなく、実、真理なのである。

屡、「私は真理である」と、「真理」という言葉を使うものが宗教などにあるが、この種の変更不可能な信念の表明である場合が多い。新興宗教とかイデオロギーには、この種のものがあるのである。いや、古来の世界宗教こそ、そのような「不合理」「非合理」から出発している。頭脳と神経回路が違うのであろうか。人類世界には、歴史上、このような考え、信念が、時折出現する。しかも、歴史の方向づけに当たって、絶大な転轍――鉄道のレールの切り替え――の作用を演じるのである。

歴史上、真理には、科学的真理と、信念的真理とでもいうかこの種の真理とが、ともに存在するのではないだろうか。われわれは、考え方について、偏見であるのか、偏見でないものか、さらに偏見でないものにも二つあるということを、慎重に見分けなければならないのである。

だから、宗教の違いからくる対立と争いは、偏見ではなくて「事実としての価値観」つまり「心実」にかかわるものである。心と頭に抱く価値も、心実という意味での脳内記憶であり、一種の事実なのである。

争いといっても、事実（心実）に基づく争いや差別の場合と、偏見や誤解による争いの場合とは、明確に区別すべきなのである。

われわれ日本人は――幸か不幸か――異なる人種、民族、部族と競り合いながら暮らすという経験が少ない。ヒンドゥー教とイスラム教とがいがみ合うインド亜大陸などと比べれば、圧倒的に少ない。わずかに、昔ではアイヌ民族との軋轢、近代では朝鮮民族との軋轢、最近では不法滞在外国人の犯罪グループくらいしか体験がないので、どうしても異民族、異文化にかかわる物の考え方において経験不足なのであり、したがって争いへの取り組みも下手なのではないか。外交下手も同列だ。

ともかく、争いは、その性質にしたがって、「分けて考えて対応する」のでなければ、うまく解決できない。

まず、頭の中の偏見や誤解というより、事実上で利害と価値観が異なる場合である。自爆テロも、殉教も、信ずる宗教における信仰からすれば、実行者は天国や極楽に行けるという確信に発する。日本の「特攻」に散華した人々も、それなりの信念に達していた筈である。「靖国で会おう」とはその合言葉だった。

そうした争いや戦争を減らすには、先に述べたように「互いに別れて住む」のがよい。歴史上、日本列島の上でも邦（くに）を分け、藩を分け、村を区分したのには、こうした暗黙の理由があったのではないか。

混住のときでも、価値観を表に出さないで済ませるように、売り買いを通じて取引する方が解決が速い。戦いが済んで「賠償」のやり取りが行われるのは、いのちの殺し合いの代りの、いのち以外の財物による差引計算なのである。そして、財物や金を手に入れたほうが、敵を殺すよりも、有用なのである。相手を殺してしまえば、もう何も取れない。殺すより、物を取るほうが次の可能性が残ってよい。

しかし、世の中には、誤りとか情報不足なのだと証明できない「信仰上の価値観・事実」があって、悪いことには、そこから、われわれと同じものを信じない輩は悪魔であり、断じて許せぬ、抹殺する、というような危ない教理を持つ信仰集団もある。そういう人々とは分かれて住み、全くかかわりをなくすほかなかろう。そして、その集団が寛容な信仰に変わるように説得するか、そのようにひたすら祈るしかないだろう。人類は、そういう集団が巨大化せぬよう、制圧するしかあるまい。

ではさらに、人種・民族間に、偏見と誤解のある場合にはどうするか。

出来れば分かれて住むことがよいのだが、地球はもはやそんなに広くないので、偏見と誤解を心に懐いた人同士でも毎日接触して暮らすほかない。エルサレムにおけるパレスチナ人とイスラエルの国民とがそうである。だから、最終的にはやはり「偏見と誤解を溶かす方法」を、どんなにしてでも工夫し続けなくてはならない。（図を参照）

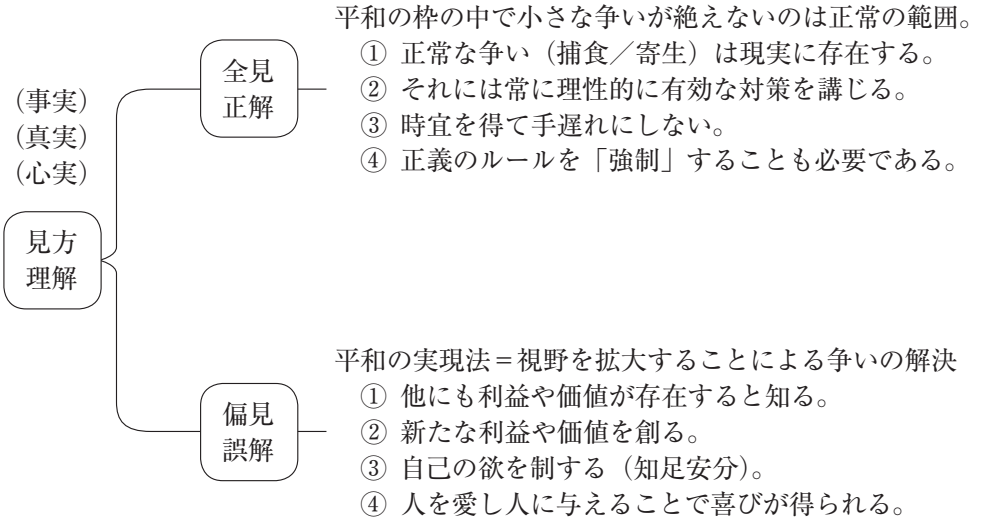
偏見と差別の問題については、最後にもう一つ、穢――気枯れ――という感情に基づくとされる問題がある。

元来、穢とは、「自然と人間社会との均衡が、人間の意思を超越した力によって崩れた時に起こる事態に関わる観念」であると言われる。（網野善彦『歴史を考えるヒント』一一六ページ。）

しかし、その崩れが穢として人間差別という「事態」につながるには、均衡の崩れというだけでは足りず、何か他に要因が加わるのでなければならない。私にはその要因が何か、まだ捉え切れない。皆さんのご教示をお願いしたい。

私の見聞きしたところ、穢の観念はインドのカーストにもあるが、インドだけではなく世界各地いたるところに、文化の問題として各種各様のものが存在するようである。

歴史の中の偏見・誤解・差別と解決法
―いのちを最大限に伸ばすために―



（注）

(1) 偏見とは、全部を見ないで一部の情報でもって全部を判断し決めつけること：対策は、できるだけ経験と認識の幅を広げ、相手とのコミュニケーションを深めること。

(2) 誤解とは、ありもしない物事、そうでないことをあるかのごとく思い込むこと：対策は、対象についてじっくりと、実際に、詳しく見聞すること。

(3) 差別とは、①人間の人格とか努力への評価を不当に低くすること、②機会（自由）の均等を制限すること、および③利益・価値の配分を努力に比例させず不公平に行うこと。こうすると、人間のいのちが十分に芽を出さなくなる。人はあまりにいのちを押さえられると、抵抗と反発が起きて、ついには大きな争いとなる。いのちを伸ばすには、社会の仕組み、つまり制度の造り方も重要。

(4) 人類の社会で争いを減らすには、制度の造り方が大切で、それには基本ルールがある。つまり、どのいのちにも、自由の分量を均等に与えることである。歴史とはその条件を整備するプロセスである。古代に、聖徳太子は、なぜ十七条憲法で、人みなひとしく「凡夫なり」と宣言したのか。明治政府は、なぜ四民平等としたのか（穢多非人の呼称の廃止。身分は新平民と呼んで残したが、日本国憲法下では廃止。）

(5) 究極的には、利己心を調節することがどうしても必要である。肥大する利己心がうごめいていれば、いくら機会均等にし富を豊富にしても、他人の領分を侵し争いを引き起こす。

問題は、こういう穢の観念が、特定の職能を業とする人々と結び付けられ、その人々を差別するという事態を生み出して来ていることにある。現代では、穢に基づく差別は、子供の差別・いじめ問題、結婚問題、就職問題などの形で潜在的に行われている。

この穢は、事実の根拠に基づく差別というより、「正当でない情報により造られた偏見」による差別であり、偽の意識・心実の結果であって、まず法制と教育によって、偏見を解消する努力を続ける必要がある。インドが憲法によってカーストを廃止しようとしているようにである。

この偏見と誤解の場合には、本当の事実が分かれば差別を区別に変え、さらに区別も無くすことができる。すなわち、偏見を取り去る練習をすることが効果を上げるのである。

心を変える練習の場は、家庭の生活、学校の教育、地域の生活、職場である。それに、現代ではマスコミとインターネットがあらゆるところに浸透しているから、それも重要な場である。

われわれが偏見と誤解を免れ、不寛容な信仰に陥らぬようにするには、生まれ落ちた直後からの家庭教育が決定的な役割を担わねばならない。そのためには、子育てをする母親、父親への事前の教育が決め手となろう。経験不足の若者だけのカップルが家族をつくり子育てをする現在では、「結婚前教育」というものが殊の外、不可欠であろう。

歴史上、民族の力は、家族の教育力に根差すから、この点を軽視してはなるまい。

ともかく、偏見と誤解の解決のためには、「それは感情の中の偏見であり、誤った『心実』であり誤解であって、真実ではない」ということを繰り返し教育し、学習し、そのような考え方を進化させるほかないのである。

学問だけでなく、偏見、誤解、差別の克服にも、楽な王道はない。王道とは、たゆまぬ訓練そのものである。

五　人類の歴史は、男と女が創造す

偏見、差別、争いについては、さらに男性と女性とのかかわりが加わる。セックスとジェンダーの問題がそれである。

いのちについての基本の学問である生物学からいえば、地球上のすべての生命には、二つの種類の生殖法があり、いのちはそのどちらかによって増え、世代をつないでいく。一つは、無性生殖といい、もう一つは有性生殖という。

まず、無性生殖とは、細胞に男性と女性の別がなくて、単純に一つの細胞が二つに分かれ、細胞の数が増えて、いのちが次世代へとつながっていくものである。自分自身で「クローン」をつくるという増え方といってよい。

特に、花の例でいえば、雄蘂と雌蘂、雄花と雌花が別の花や株に分かれておらず、同じ一つの花だけで実がなるものがある。これだと、雄の株と雌の株との間の争いという問題ははじめから起こらない。いのちの間の鬩ぎ合いとしての争いは、食べ物の奪い合いのようにどんな生殖にも固体の間では現れるが、無性生殖の場合には、「雄と雌にまつわる争い」は生じない。

他方これと違って、人類の生殖は有性生殖というものである。いのちの姿の多様性は、歴史における知恵であるが、それがここに有性生殖が現れている。

オスとメスという遺伝子の種類が分かれるのは、自然の知恵であろうか。それを掛け合わせることにより、病気とか環境変化に対する抵抗力が強いという性質を高めようというのであろうか。いろいろなタブーをつくって近親結婚を避けようとしてきたのも、その知恵の一部であって、そのマイナス効果を嫌うのである。近親の間では遺伝子の状態は似ており、それを組み合わせると、長所も一段と高まるが、欠点も余計に重なるからである。

ジャングルの中で近親関係にある部族の人たちの間に特定の病気――長所もまた――の傾向が高く、外部の文明に触れた途端、部族が絶える、ということがあるのも、同じ型の遺伝子や生活習慣の積み重ねがマイナスに現れるからであろう。いのちと言うものは、ブレンドするほうが、長い目で見るとしぶとさが高まるのであろうか。多様性が必要なゆえんであろう。

おまけに、雄と雌という生物的なセックスの上に、文化的な衣であるジェンダーという文化的差異を加えてきたのも、人類の知恵かも知れない。ただ、その衣が、昔の中国の纏足――足に靴をはめて発達を阻害させるやり方――のように、人間性（自然）を歪めるものとなっては困る。

いのちにおいては、雄と雌との区別があって、雄と雌との協力とともに、雄と雌との争いも起こる。つまり、人間であれば恋人を取り合うような三角関係とか、失恋とか、夫婦喧嘩、さらには離婚騒動までが起こるのである。

そして、人類社会の歴史を調べると、仕事や家事の分担といった男と女の間の関係とその破綻が歴史を動かす重要な力になっていることが分かる。

各国各地とも、時代の早いころでは、男女の間で、様々な区別が存在している。例えば、相続や財産権をどうするか、選挙権をどう与えるか、離婚の条件をどう定めるか、雇用の条件の均等化をどう図るか、夫婦の別姓を認めるか、などである。

これらは主に家（ファミリー）の制度にかかわる。一九七〇年代まで、タイの北部チェンマイ（Chian Mai）あたりでは、娘の子が両親と一緒に暮らし、財産も相続するという仕組みになっていた。

われわれ人類の一番基本的な生活単位は、男性と女性の結合である。

もしも源頼朝が北条政子と出会わなかったならば、政子の実家の系列である北条氏――なんと平氏一族――が執権として鎌倉幕府の権力を握ることもなく、日本の歴史のコースは随分違っていたであろう。ソロモンの王とシバの女王とが会うこともなく、クレオパトラの鼻の高さがもう少し低くて、英雄たちがクレオパトラに気を惹かれなかったら……と、歴史では男女にまつわる「もしも」が語られる。

歴史は、いのちの相である男と女の関係について、数々の面白い事実を教える。

ところで、人類を導いて来た思想で最も強力なものは宗教であるが、それが男と女の問題についてどのような見方を教えたか。そこには、かなりの問題性が内在する。

今日でも、新興の宗教は絶えず雨後の筍のように出現してくるが、人類の宗教の中で一番優勢なものは、今から二五〇〇年から一五〇〇年くらい昔の時代――枢軸時代――に出現した世界宗教である。

西方浄土だからというわけではないが、西方からあげると、古代ギリシアのソクラテス（前四七〇～前三九九）に代表される人間中心主義がある。これは元京都帝国大学教授、作田荘一博士によれば一つの宗教と見なせるものであって、神への信仰をもちながらも人間性の働きを崇めるものであって、ヒューマニズム教といえる（『道の言葉』全六巻、非売品）。また、ユダヤ教、キリスト教、それにその系統を引くイスラム教もある。

また、少し東に移動してインド亜大陸には、三〇〇〇年以上の歴史を辿ることができるというヒンドゥー教と、その中から一つの枝として生まれた仏教がある。それに、シク教という比較的新しい宗教が生まれて、ヒマラヤの麓一帯、北インドからパキスタンまで信者が分布している。頭にターバンを巻いた

大男の人たちである。

もっと東方にきて、東アジア大陸には、今から二五〇〇年以上も前に出現した天地人の思想である儒教と道教がある。それにわれわれの日本では、神道と呼ばれるようになった土着の随神（かんながら）の道というものがある。

こういう高等な宗教や哲学が出現した時代を、ドイツの哲学者カール・ヤスパース（一八八三～一九六九）は、『歴史の起源と目標』（理想社）という有名な本の中で「枢軸時代」（die Axenzeit）と名付けた。枢軸とは、以下のように、人類の歴史の機軸となり大黒柱となる精神原理が集中的に生まれたという意味である。

①ソクラテス（前四七〇～前三九九）は、自身は神への信仰を胸に秘めながら、人々の間の理性的な対話をすすめ、「自分は無知である」ということを知るため、真理へのいざないを教えた。そして、正義の観念をもとに、正当な国法に従うということの大切さを、毒盃を仰ぎ身命をかけて教えた。

②イエス（前四～三〇）は、神への信仰をもって、十字架にかかることにより、唯一絶対の神の愛の働きというものを人々に示した。それまでの「目には目を、歯には歯を」という復讐の世の中を乗り越えることを教えた。「敵を愛しなさい」と。そして、神の無償の愛を見習った「隣人愛」に向かう生き方を、人類に教えた。

③モハメット（五七〇?～六三二）は、時代をくだって、ユダヤ教の支配する地域であったアラブに最後の預言者として現れ、新たに世界宗教たるイスラムの教えを伝えた。その言行録として『コーラン』が遺され、唯一の神アッラーに従う信仰の道を教えた。

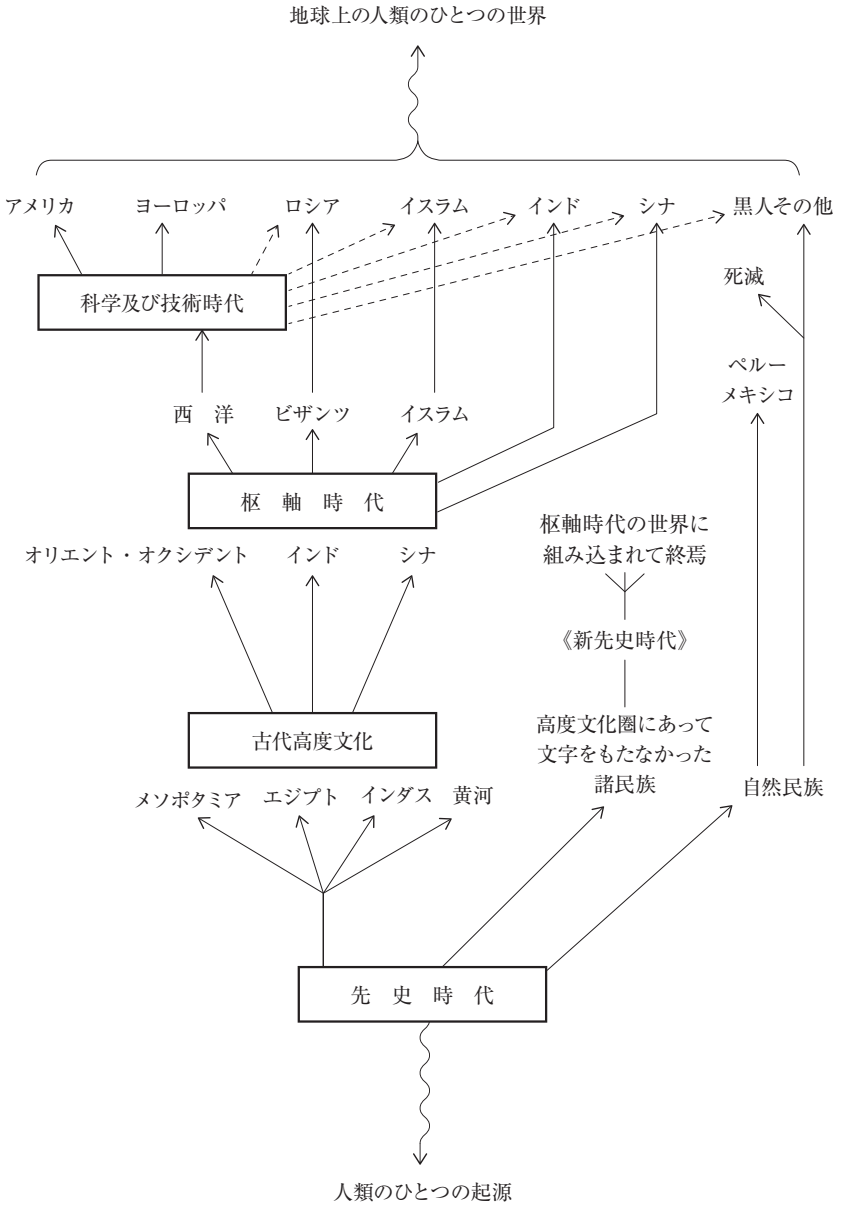
④孔子（前五五一～前四七九）は、君子の道として、愛とほぼ同じ生き方の原理である仁というものを力説した。子孫は永続し、無冠の帝王として称えられた。

⑤ブッダ（前四六三～前三八三、あるいは前五六六～前四八六）は、北インドのシャカ様に生まれて人々を教化し、無明を脱し、慈悲を実行することを教えた。

また、日本では、『古事記』、『日本書紀』の古典に見えるように、天照大神、聖徳太子（五七四～六二二）をはじめ、さらにその後を継ぐ人々が、清く明るい心を造り、さらに自己への受容と反省、寛大な心と、慈愛という徳を自ら実行して示したとされ、それが日本の民族の魂を導いてきた。

問題は、これらの聖賢たちが、特に男と女について、どのような見方をしていたか、ということである。これは世界史上の

世界史の歩み



（注）カール・ヤスパース『歴史の起源と目標』理想社、昭和39年、64ページ。

実に興味深い論点とはいえまいか。

ちなみに、歴史の流れの上には、替わるがわる男時と女時という時代が訪れると言ったのは、歴史家の木村尚三郎教授である（『男時・女時の文明論』ＰＨＰ研究所）。

この説によって、日本の歴史をたどってみると、次のようになろう。

㈠奈良時代は開拓と征服に熱中した男時の時代
㈡平安時代は平和と文化を洗練した女時の時代
㈢鎌倉から戦国にかけては戦のプロたる武士が力を握った男時の時代
㈣江戸時代は徳川氏が全国に平和と秩序を行き渡らせた女時の時代
㈤富国強兵に明け暮れた明治は男時の時代

さて、右にあげた古代の聖者たちは、女性をどのように位置づけたか、それが問題だ、という次第。

日本国際文化研究センターの川勝平太教授の見解によると、洋の東西を問わず枢軸時代の聖者たちは、どうも「男性原理」というものを基本においた生き方を説かれたようだという。

（講演「二十一世紀の教育」於廣池学園、二〇〇二年三月二日）

なるほどそう思って見直すと、『旧約聖書』には「神は父である」とし、母であるとは考えられていないから、それを基にユダヤ教は男性原理に立つことになる。男性であるイエスには、女性へのやさしさを浮き彫りにする話も多く、故・遠藤周作さんには、イエスの愛した女性たちという方面の作品もあるくらいだが、やはり神は母でなく「父なる神」といわれるから、キリスト教の根本も男性原理ということになろうか。

マホメット（ムハンマド）が開いたイスラム教も、同じ『旧約聖書』を引き継ぐから、男性原理に立つといってよい。イスラム社会は、女性がベールをかぶるなどいくつかの厳しいタブーを保つ。それは「女性を大事にする」という意味であると一応説明されるが、やはり『コーラン』の神は男性であって、男性中心の哲学を持つようである。

ギリシアのソクラテスはどうかといえば、「父なる神」というような大前提に立って人間の道を説いてはいない。悪妻クサンティッペは、仕事をさぼる夫ソクラテスを、バケツで水をブッかけられるなど、随分とひどく扱ったらしい。広場で若者たちと対話ばかりしていたからだろう。

しかし、ソクラテスは、ことさら男性が女性より上位だとは

述べていないようだ。しかし、全体として、古代ギリシアの人間主義は、やはり男性（man）をベースにしたもののようである。ギリシアに起源をもつのが民主主義であるが、その後の世界史で長い間、女性に参政権が与えられずにきたのは、最初の古代ギリシア以来、ボタンのかけ違いがあったのではないか。

一方、南アジアのヒンドゥー教から出た釈迦の教えでは、男性原理はそれほど優越せず、むしろ母性原理が優越したようだが、仏教が中国（シナ）に渡ると、支那仏教では仏典を漢訳する際に、男性優越主義に立つ儒教文化の影響で父が母より優先され、インドでの母父が、序列が逆転して父母となったようである。（中村元博士の説）

東アジアにおいては、孔子に代表される儒教が文化圏を形造り、そこに住む人々は男性中心の血統主義という形でいのちの系列を説く。つまり、君臣、父子（母子ではない）、夫婦、兄弟、朋友という五つの人間倫理のうち夫婦については、「夫婦別あり」として男性優先を示す。婦は夫と姓を異にし、夫の家の姓の系列に入れられない。五倫つまり五つの基本的人間関係の道徳を説くときに、他にも「父子親あり」とはいうが、「母子」という関係は出てこない。昔、日本でも父兄会といった。今は保護者会という。

こうした中国儒教文化に大きく影響された日本の社会が、建前上、男性中心の傾向をもった社会であることは、やはり否定できないだろう。

しかし、古来の日本は、天照大神という女性神（？）を最高価値の担い手とする神話伝承の体系を大事に守ってきた国であり、本来、男性原理が先に立つ国ではなかったといえよう。

これからの人類社会は、こうした男性中心社会の原理をいかに考えるか。人類のいのちのあり方にかかわる重要な問いが、ここに潜んでいるのではないか。

六　男女補完、ジェンダーを活かす

宇宙的に考えれば、一切の存在は自己でないものと共に在って、始めて現実に存在する。ところが人間は、頭でそうは考えない。例えば、左は右ではなく、左は左である。そこで、左は左だけで存在すると思ってしまう。Aというものは、「Aである」から、「Aだけで存在する」「Aがある」と思ってしまう。定義（である）を存在（ある）と取り違えてしまう。これを「自同律」（オートノミー）の考えと呼ぶ。

AはAだけで存在すると思ってしまうのは、しかし、誤った

「心実」つまり誤解ではないか。頭の中で「Aである」と定義したAが、そのままAだけで。「実在する」（ある）と思い違いするのではないか。AはAであると言うのは頭の中で拵えた定義であり観念であって、「思惟の論理」なのである。しかし、AはAであっても、Aだけでこの宇宙に存在するというのは、「実在の論理」ではないのである。

むろん、Aは定義上、BやCやその他のものではなく、まさしくAそのものである。しかし、AはAでないものとともにあってはじめて実在するというのが、「実在の論理」である。これを「相互律」（アレロノミー）と呼ぶ。自他不二、つまり自と他は同じものではないが、自は他なしには存在できないというのである。

人間の身体でも、文化の事柄でも、左は右と共にあってはじめて実在する。定義上、左は左であるが、それは頭の中でそのように定義された左であって、実在する左ではない。頭で定義された左が、左だけで実在すると思うのは、人々の頭の中で拵えた思い込みに過ぎないのである。左は右があることと共に、はじめて存在するのである。（「である」と「がある」との違い、つまり自同律と相互律との関係については、難波田春夫『近代の超克』行人社、参照。）

この見方は、われわれ人間の抱く人間観を作り替えることになる。

自分は自分だけで存在してはいない。自は他あるによって存在する。天地自然の恵みを頂き、他のいのちの作用を受け、それらいっさいが相互に作用してはじめて、自分といういのちが生存できるのである、と悟らせる。

われわれは、このように、自分を孤立させる囚われの見から脱却して、全体のいのちの関連の中に位置づけるように、見方を変えねばならないのである。

自分の果すべき任務は「他を生かすことにあり、それよって自分を生かすのである」と悟れば、世の中の争いは大いに様変わりするであろう。

世の中の人々が、「相互律」という実在の論理を腹に据えれば、いのちの間の争いは随分と減り、自他のいのちの力が合体して、しあわせの程度が高まることであろう。

ところが、今日、いたずらに「男と女は敵対するもの」と見る向きがある。男性と女性との文化的、社会的な役割の違いをジェンダーと呼んで、ジェンダーなるものは一切、廃棄するほうがよいと、「ジェンダー・フリー」を主張する思想が強く

なっている。性差に基づく役割の分担は、敵対と差別を生むというのである。

これは、社会批判派にとって新しい闘争点として採り上げられている。マルクス主義が盛んであった頃には、労働者と資本家の階級対立を煽り立てることで活動舞台があったが、時代が変わってそれはできなくなり、その代わりに男女対立を煽り立てることへと舞台が移ったことを物語るものだろう。

だが、今日流行のジェンダー・フリーは短慮ではないだろうか。男と女は、頭脳にかなりの違いがあるとも言う。それはともかく、相互律の立場から、男女は同一でなく、相互に対立しつつも、敵対ではなく、各々の特性をもって、他なしにあり得ない存在である。そうと知れば、人類の歴史は男と女の間の相互扶助の歴史であると見えてくるであろう。

このジェンダー論は、今日では文化論争になり、ジェンダー・フリーが理想だ、という一段と徹底した方向に足を突っ込んでしまった感がある。

日本で最も早くから「ジェンダー」(gender, Genus) 問題を議論するきっかけを作ったのは、故・玉野井芳郎教授（一九一八～一九八五）のグループであるが、それはイバン・イリイチ（一九二六～）の説を踏まえながら、問題を考えようとしていた。物事は、混迷してくると、元初に還って整理し直すことが役に立つから、その頃のことを取りあげてみよう。

ジェンダー論は、もちろんこれまでの過剰な男性優位の社会を批判するものであるが、元来、女性が

「子どもを産む＝生むということ」

「生命を自分の体の内部で育てるということ」に、「男性の伺い知ることのできない人間の世界がある」

というところから、男性、女性をつつんで人間の在り方を考えて行こうとしたものである。

そのとき女と男は、右と左、上と下というような対称ではなく、「非対称的な関係」にあると見るのが肝心なところである。（玉野井芳郎監修『ジェンダー・文字・身体』新評論、一九八六年、二五ページ以下、参照。）

ジェンダー・フリー論争では、それを促進する側は男女の文化的区別は何でも完全に無くすべきだという極論を唱え、それに反対する側は、往々にして男女分業の現状を固定化し、「現状が善い」という単純な保守的思考に留りがちのようである。しかし、そういう「あれかこれか」の議論は歴史の流れの中で均され、結局、落ち着くところに落ち着くものではないか。

なお、アメリカでは、一九六〇年代からの離婚急増にともなう家族危機への反省のなかから、人々は様々の新しい試みを模索している。その一つに、「新しいコミュニタリアニズム」（responsive community）の提案と、「同朋結婚」（peer marriage）というものが姿を現しつつある。この方面については、アミタイ・エチオーニ『新しい黄金律』（麗澤大学出版会）と、ペッパー・シュワルツ『結婚の新しいかたち』（明石書店）をご紹介したい。

しかし、「振り子のどちらかの極端に行ってみる」という実験を、わざわざ現実の歴史に強制するのは、愚というものではないか。

物事は、中庸と漸進を尊ぶべし。

なのに現代、女性が子供を生み、父と母が協力して子育てをする――人口爆発は抑えつつ――という永遠の文化を蔑ろにする風潮が、世界各国に強まっている。その中から、あまつさえ母性と父性という性の考えすら完全否定する人たちが現れている。しかし、それは浅はかな考えではなかろうか。

歴史を振り返ると、子育てを軽視した文化や国は滅ぶか、滅ばないまでも衰弱するであろう。そして、子供を軟弱に育てると「長者三代続かず」ということにもなる。国家の歴史では見えてこないが、地方史をめくると、その地方の永続した家系、亡んだ家系が浮かび上がってくる。

男女相互扶助のあり方は、今日のような仕事優先・家庭軽視の路線に毒されてはいないか。現代の思想は、資本主義、産業主義、市場主義に染まったもので、偏った考え方ではないか。かつて社会主義も誤って家族否定論を性急に唱えたので、失敗したのだ。人類は、いのち優先を原理とすべきなのではないか。

江戸時代の武家社会や現代でのサラリーマン時代には、「男は外で仕事をし、女は内で家事をして」であった。

しかし、「男も女も、心合わせ特性を活かして育児して、力合わせて仕事する」というのが、これからのあるべき人類のいのち観ではないだろうか。実は、男も女も共に働き、子育てをするのは、一昔前の農村や山村、漁村、街の職人や商家に、多く見られた当り前の姿であった。

ともかく、男性と女性の性の違いによる役割や仕事の違いをまったく否定する、という画一主義は過激すぎて、かえって人間性に反するのではないか。人類のいのちの歴史としては、母性と父性の違いを完全に無視することは誤りであろう。

現代は、ものを造って売り買いするような仕事優先の社会であり、しかも激烈なグローバル競争と仕事優先主義の社会である。

ジェンダー・フリー論者は、それを基準にし、それに合わせるために男女の役割分担を無くそうとするのではないか。そうした歴史の現段階での特殊なジェンダー・フリーの思想は、非科学的で文化破壊的な発想ではないか。それこそ現代という特定の歴史段階の仕事の状況のみにしばられた発想ではないか。今日の産業主義にとらわれてはいないか。

われわれは、いのちの再生産を根本におき、長い目で物事を考えねばならない。いささか非人間的となった今日の産業に合わせるのではなく、産業ビジネスのあり方をこそ、作り変えるべきときではないだろうか。いのちの再生産のために両性の特質を活かせるようにするのである。

男女の間の差別的な役割の差を無くそうという趣旨は、幾分かは分かるが、今日の産業主義に無反省に適合する形での発想は、今日という特定の時代の産業主義に足をすくわれてしまっている。

家族と家庭生活と子供教育を抑圧し分裂させ、かえって無理を生じ、仕事のために子供を生まない、生めない、育てない、ということになる。これでは、いのちの歴史を断絶させることになろう。工場主義、産業主義の方をこそ変えていくという発想を、もっと強化すべきではないか。

われわれは、二千年前の古代の聖賢から、人生の知恵を学ばねばならない。しかしまた、その古代宗教に当時の文化の偏見が遺されているということも、正直のところ警戒し吟味し反省しなければならない。そして、古代の思想は未完成交響曲であるから、それを受け止めて、一小節だけでも、われわれ自身による現代の作曲をつけ加えたい。

〈資料〉マザー・テレサのメッセージ〈第四回国連世界女性会議、於北京〉

May 25, 2000

親愛なる皆様へ

第四回世界女性会議で北京にお集まりの全ての方々に神の祝福のあらんことをお祈り申し上げます。私は、この会議によって、あらゆる人々が、神の計画において**女性だけに与えられた役割**を知り、それを大切なものと受けとめ、さらに

尊厳を与えること、それによって、ひいては女性達が一生のうちにこの神の計画を実現できることを希望します。

私には、なぜ男性と女性は全く同じだと主張し、**男女の素晴らしい違いを否定しようとする人々**があるのか理解できません。神より授けられたものは全て善きものでありながら、全てが同じものであるとは限りません。私はよく、私のように貧しき人々のために尽くしたいとおっしゃる方に対して、「私にできてあなたにはできないこともあり、あなたにできて私にはできないこともあります。しかし、ともに力を合わせれば、神にとって何か素晴らしいことができるのです」と申し上げます。男性と女性の違いとは、これと同じようなものなのです。

神は、私達ひとりひとりをお造りになりました。そして、更にありがたいことに、全ての人々を、愛し、愛される存在にして下さっているのです。では、神はなぜあるものを男性に、またあるものを女性にお造りなったのでしょうか。それは、**神の愛のひとつの形が女性の愛で表わされ、別の形が男性の愛で表わされる**からです。どちらも愛するために造られていながら、それぞれの愛し方が違うように、**男性と女性は互いを補い合って完成されるもの**であり、神の愛を体現するには、どちらか一方よりも両方そろった方が、より神の愛に近づくことができるのです。

女性特有の愛の力は、母親になったときに最も顕著に現れます。**母性**は神から女性への贈り物。私達は、男女を問わず世界中にこれほどの喜びをもたらしている素晴らしいこの神の贈り物に、どれだけ感謝しなければならないことでしょうか。しかし、私達が、愛することや他者ために尽くすことよりも、仕事や社会的地位の方を大切だと考えたり、妊娠中絶をしたりすれば、この母性という神の贈り物を破壊することにもなりかねません。仕事も、夢も、財産も、自由も、愛に代えることはできません。母性を破壊するものは全て、神から女性への最も大切な贈り物――女性として誰かを愛する力――を破壊するものなのです。

神は私達に「汝を愛するがごとく隣人を愛せよ」とおっしゃいました。だから、私はまず正しく自分を愛し、それからそれと同じように隣人を愛します。しかし、神が自分をお造りになったことを受け入れないとすれば、どうして自分を愛することなどできるでしょうか。**男女の素晴らしい違いを否定する人々は、自分たちが神によって造られた存在であることを認めようとしませんし、それゆえに隣人を愛すること**

もできません。彼らがもたらすものは、対立と不幸と世界平和の破壊でしかありません。例えば、私がこれまで再三申し上げてきたように、妊娠中絶は現在の世界平和にとって最大の破壊者であり、男女の違いをなくそうとしているのは皆、妊娠中絶に賛成する人々なのです。

死と悲しみの代わりに、世界に平和と喜びをもたらしましょう。そのためには、神に平和という贈り物を願い、互いに神の子の兄弟として愛し合い、受容し合わなければなりません。子供達が愛することと祈ることを学ぶのに最もふさわしい場は**家庭**です。家庭で母父の姿から学ぶのです。家庭が崩壊したり、家庭内に不和が生じたりしていれば、多くの子供は愛と祈りを知らずに育ちます。家庭崩壊が進んだ国はいずれ多くの問題を抱えることになるでしょう。私は、とりわけ裕福な国々で、愛情不足と疎外感から逃れるために薬物に向かう子供達を幾度となく目にして参りました。

しかし、家族の絆が強く、家庭が円満であれば、子供達は父母の愛の中にかけがえのない神の愛を見ることができ、自分の国を愛と祈りに満ちた場にしていくことができるのです。子供は神から家族への最高の贈り物ですが、子供にとっては父と母の両方が必要です。なぜなら、**父親は父親らしいやり方、母親は母親らしいやり方で神の愛を体現して見せる**からなのです。ともに祈る家族が離れていくことはありません。そして、家族がひとつであり続ければ、神がそのひとりひとりを愛してこられたように、互いを愛し合っていけるでしょう。愛のあるところには常に安らぎが生まれます。

心に愛の喜びを抱き続けましょう、そして、出会った全ての人々とその喜びを分かち合いましょう。北京会議の全ての出席者と、この会議によって救われようとしている全ての女性が、ともに愛と安らぎの中で暮らし、それぞれの家族とこの世界を神にとって美しいものにするために、おひとりおひとりがマリアのように慎ましく、清らかであることをお祈り申し上げます。

ともに祈りましょう。
全てを神の栄光と御心に捧げて。
神の祝福あらんことを。

（柏市・上橋泉氏のご教示による、ゴチ、ルビ追加。）

七　老いの扶養の歴史を考える―人生百年説―

以上は、男女と夫婦と親子という中年くらいまでの時期のい

のちの姿を念頭において、「いのちの在り方」を考えて来たが、もうひとつ歴史を振り返れば、いのちが老化する・老熟する・老衰する、そして死ぬ、という段階がやってくる。誰しも、無常の風に会わぬということなし。いのちは、発生し、誕生し、生長し、活躍し、老衰し、死滅する。われわれの歴史の新たな重大問題は、高齢社会のそれであって、「老いるいのち」をいかに過ごすか、ケアするか、全うするかにある。

中国の古典『禮記』（曲礼第一）には、人生百年説が述べられている。それをご紹介すれば、人生とは次のような段階から成る。（図を参照）

生（零歳）、幼（十歳）、若（二十歳）、壮（三十歳）、強（四十歳）、艾（五十歳）、耆（六十歳）、老（七十歳）、耄（八十～九十歳）、期頤（百歳）

死という無常の風は、誰にも平等にやってくる。それは、いつ訪れるか分からない。男女の間で争っている暇はない。老境に入り死に至る病に取り付かれてから、慌てて「死にがい」などを探し始めても、時すでに手遅れ。

「時は得難くして失い易し」（『史記』）

死は、頭がボケないでしっかりしている頃から、心身ともに準備しておかねばならぬ。ボケ始めてからでは手遅れ。この点は、あとの章でもっと細かく考えよう。拙著『社会科学のこころ』成文堂、二二六～六七ページ、をご覧あれ。

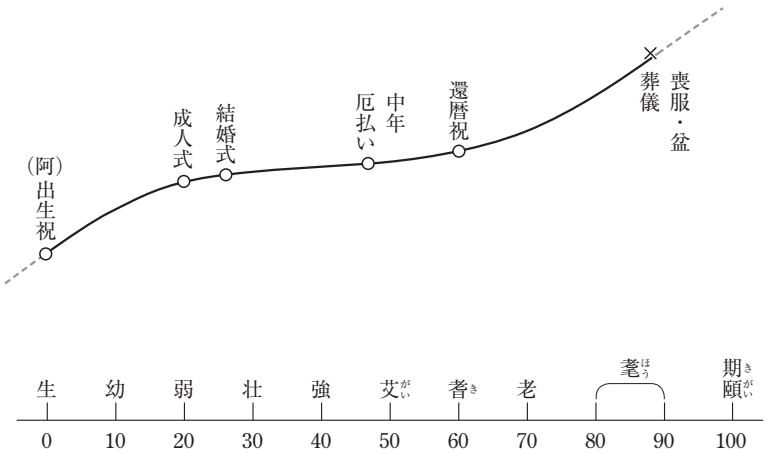
われわれは、「おじいさんは山にしばかりに、おばあさんは川にせんたくに」という桃太郎の伝説の言葉を聞いて育った。現代の子供たちは、洗濯機の音のそばで母親（父親）の着物の裾をつかんで甘えたり、ものをねだったりする。「川でのせんたく」も、「山でのしばかり」も不要となった。

工場で肥料が製造され、プロパンガスが生産され、「汚れをきれいにする」という廃棄物処理の方法も機械化された。山とか川という自然界と接することが少なくなった産業文明に、老人も子供も生きる。家庭生活では、機械化された自然界と接触することとなり、生の自然界と接触することが激減した。そこでの老化では、おじいさんやおばあさんの姿も、変わってくる。子や孫の続かない祖父祖母が増える。寂しいことだ.

われわれは、歴史から学んで、新たな時代にふさわしい「心実」を創造しなければならない。

老化の外形の姿は、文明によっても、文化によっても異なる

人生百年説（人生の波）



（注）人生の年輪は中国古典『礼記』（曲礼第一）による。人生は旅であり、家、世間、日常の流れに出家、出世間、非日常を織り込んだドラマである。中国漢民族の先人は、すでに遠い昔、人生百年説を考えていたのである。すごいことではないか。こういうところが、巨大文明をつくり、他の地域へと輸出することができた文明・文化の特質であろう。（永安幸正『社会科学のこころ』成文堂より）

が、老化する人間の内面はどうか。人類の歴史の営みにとって、それは永遠の宿題であろう。その点では、先に述べた人類の教師の方々の体験と教訓は、有益なものを数多く含んでいる。

「永遠のいのちを目指しなさい」（イエス）

「自己を保ち、自己を法を導きとして生きなさい」（シャカ）

「自己の天命を知って、天命に従いなさい」（儒教）

「天国、極楽は、心にあり」

「この世こそが極楽なり、天国なり」

「いま、ここに、生きよ」

人類の教師の教えには、その中に古代の男尊女卑の要素が含まれていた。しかし、そのことにこだわり過ぎて、その教えの全体を学ばないとすれば、これまた優れた宝を見失うだろう。

運転でもそうだが、われわれは、当面の物事に取り組むとき、遠くの目標を考えながら、今のことに集中するのがよい。そうすれば、途中、右往左往しなくて済む。車の運転では、ライトは、遠くを照らすために上げ、また近くを見るためには下げる。その点で、歴史が役立つ。そしてここに、過去と未来からの「今の歴史」づくりのコツがある。

われわれの理想は、宇宙の中での――男と女との間でも――いのちの調和つまり「いのちの美」というものであろう。人類

のいのちは、安心、喜びを求めるが、それは刻々、いのちの和合としての調和美を探求することなのだとはいえまいか。歴史の中での男と女は、二人三脚を組んで、美しいいのちの調和のドラマを演じる俳優ではないのか。

出雲地方の安来節には、連理の松を引き合いに出し、「偕老同穴」――ともに老い同じ墓に眠る――の理想を賞でる。夫婦は共に二人三脚で歩み、寿命を全うし同じ墓に憩いたいわけである。

ある社会や国家の歴史の質の善し悪しは、何によって最終的に判断されるか。いのちの誕生と育成・教育だけでなく、いのちの老化――その極限は死――というものをどのように扱っているかによってではないか。将来あるはずの子どもたちが、ろくに食い物もなく空き腹を抱え、読み書きソロバンを教えられることがないのも悲しい現実だが、他方、老人がいのちの最後の段階を看取られることなく一人淋しく人生を閉じるのも、耐えられない悲惨といえる。やはり、一人でも多く安心立命を遂げることができるような社会でありたいものである。

老人に安心と喜びを与えられないような国家社会は低級なものではないか。

私は、近年、地方史の資料を読むことに興味が向かっている。地方の歴史は、国家レベルでの歴史と異なり、そこに住んだ人々の息遣いが伝えられているからである。マクロな国家社会の制度や政治、経済、軍事の平均像ではなく、生活のひだ、泣き笑いに密着した出来事がそこには盛りだくさん記憶されている。

この密着度という点では、家族の交わりをともなって個人の伝記が最も優れているけれども、地方史にはそういう家と個人の伝記の事実を組み込みながら、暮らしの小さい範囲での人々の集団がどのような人と人との交わりを作り出しながら、苦しみと楽しみを共にしたかが、記録されている。そこでの老いの在り方は、集落全体で行っていた「野辺送り」――今は殆ど見られない――に象徴される。単に親類縁者のみでなく、ムラの人々による魂の送別が営まれる。

遠い異国の地で戦死した英霊の弔いも、九段の靖国神社に祭られるという形だけでなく、親祖先の眠るところで一緒に安らぐようにと、村人がこぞって心を寄り合って送る。これは個人の伝記にも、国家の戦没者慰霊祭にも、現れない郷土という場所である。

霊力を共にする祭りにおいてもこれと同様であるが、歴史というものは、個人の伝記と、国家の歴史との中間に、地方の郷

土。の歴史を忘れてはならないであろう。

国家の構造改革が叫ばれるこの頃、その改革論はしばしば、個人主義と自由主義との掛け合わせの思想に立ち、いのちの基本単位とその意味を個人生命に分裂させて還元し、そういう個人生命が出会い、取引するような自由社会を作り出すことをもって理想とする。それでよいのか。

生命は、しかし孤立でなく連帯の中にこそ、より充実した一生を遂げるものであるから、われわれは連帯（solidarity）というものに光を当てる歴史を掘り起こさねばならないのである。日本では、一九六〇年代からの都市化と農村の過疎化にともない、いのちの連帯が引き裂かれる社会となったから、余計にその必要がある。

地方史を発掘し、記憶して、子孫に伝えていくことは、いまや喫緊の課題となって来ているのではないか。

ところで、どの国民も、家族も、いのちの集団はすべて、個人のいのちからなる。その個人は、山に例えれば、山登りという成長期と、山頂の歩きである働き盛りの壮年期と、下り坂という老年期と、三つの段階を経過して一生を終える。集団としては、そういう三つの段階を通るいのちを育て、働き口を与え、老年期をケアしなければならない。どんな国家社会でも、このいのちの三つの段階についての仕組みを用意しなければならない。

人類の長い歴史の行程を振り返ると、老人の扱い方に様々な工夫が見られる。有名な穂積陳重『隠居論』（復刻版、日本経済評論社）には、老人は年老いて役に立たなくなると、棄老といってどこかへ捨てるという風習があったとされる。

穂積博士によると、老人の待遇には、食老俗、殺老俗、棄老俗があり、さらに退隠俗がある。退隠というのは「隠居」といえるものである。

隠居は、法律的にいえば、家制度が存在した時代に、家を代表する戸主権を放棄し、次世代の子孫に戸主権を譲渡する制度であったが、その趣旨は社会生活から引退し、老後を安楽に暮らすというものである。現代では定年制度に当たるといえようか。

姥捨山伝説はいう。あるとき、子供の青年が年老いた自分の母親を、嫌々ながらも世間のしきたりによって山に捨てに出掛けた。息子は老母を背中におんぶして一向山道を上って行く。そのとき、老いた母親が、道すがら木の枝を折っている。息子は知る、息子が帰りにそれを見ることにより、道を間違わないようにという親心からであることを。

息子は母のその心を知って、年老いた母を捨て置いて帰るに忍びなくなり、匿って生きながらえてもらうようにしたという話。「楢山節考」（深沢七郎氏の原作）という映画にもなったので年配の方は記憶しておられるであろう。人類は、その後、老人の価値を認め、老人を大事に扱うようになったといわれる。

現代日本でも、年金の制度を巡って、国会の議論が喧しいけれども、事は簡単ではないか。要するに、人生の老年の段階をいかに過ごすか、その生活費をどのように工面するか、病気や痴呆や老衰になると、いかにケアするか、その費用と労力をどのように賄うかである。それには、三つの方式がある。

①個人自己責任方式

各人自分の老後には、若いころ自分が蓄えたもので生きて行く。他人には頼らない。自分で財産を作り、貯蓄をし、保険を掛けるなど、方法は様々だが、自己責任の原則で行くのである。

②家族責任方式

老後は、子供に面倒を見てもらう。子供というものは、年老いた自分の親の面倒を見るのが自然の努めである。ほかの動物はそういうことしないが、そこが人間という万物の霊長の霊長たるゆえんではないか。

③集団責任方式

そういう事が理想としても、子供がいないときとか、不慮の病気などで、右の方式を貫徹できないときがある。そのときには、親族で面倒を見るとか、地域でそうするとか、会社でか、国家社会で面倒を見るとか、ともかく集団でその老人の世話をするのである。現在論議されている年金という方式は、これである。このほかにも、すべてを消費税など時々の税金で賄うという方式もあり得る。

歴史の教えるところでは、家族の核家族化と崩壊と福祉国家思想の普及により、個人自己責任と家族責任方式は徐々に比重が小さくなってきている。やはり、いのちは集団で支え合うほかないようにできているのであろうか。

矛盾することのようであるが、人間は、元気なときには個人個人で勝手に生きたいものだが、弱くなると結局多くの人の世話になるほかないのであるから、いつの時代にもこの個人主義と相互扶助との間の堂々巡りをするのであろうか。

しかし、そのように見るにしても、個人責任と家族責任とを全くゼロにすることは不可能であり、望ましくもない。もしも完全に自己責任原則を取り払えば、誰もが自己努力を放棄して砂糖にたかるアリのように、他人の懐におんぶする寄生とい

う現象を生み出すであろう。そうなると、年金基金は赤字になるほかない。

今日の年金の方法は、若い世代が老人世代をどのように「食べさせるか」という問題であり、若い世代の日頃の生活の余力を当てて老人世代を扶養するものである。

若い世代の人数が少子化で減少すれば、若い世代の一人当たりの負担は重くなる。急激な子供の減少は困るのである。社会の変化は急激でない方が好ましい。

次に、人類社会のおいて、相互扶助の程度と範囲は、どのくらいになるかというと、一方で国民が生きるのに資源をどのくらいの遠くからもってくるか、それに応じて、他方でどのくらい遠くの人のケアをしなければならないのかが、決まるのではないか。日本がどこかからか石油を貰う・買うと、それに対して代金を支払いさえすればよい、ケアの必要などない、という思想もあるが、それは誤りである。

やはりその国から難民が出たり病弱な老人が出ると、石油代金の支払いのほかに、福祉の援助つまりケアという扶助をお返しすることが求められるようになるであろう。

以上の老人の扶養問題は、子供の数が急激に減少する少子化問題と不可分である。老人比率の比率の増加問題の裏側は子供減少問題である。日本は有史以来、老人増加、子供減少というアンバランスに直面している。これをどうするか。

人口が爆発することは地球環境から好ましくない。かといって、急激な人口減少も社会が破壊される。しかし、若い労働力を外国からどんどん導入すればよいという説は、妥当性を有しない。それを許せば社会の文化秩序は破壊される。

若い世代が子供を産みたくないという気持ちを抱いているのは、いかなる理由によるのだろうか。欲しいけれども産めないのか。そもそも子供が欲しくないのか。子供が欲しくない人はそれでよい。人の価値観は自由である。

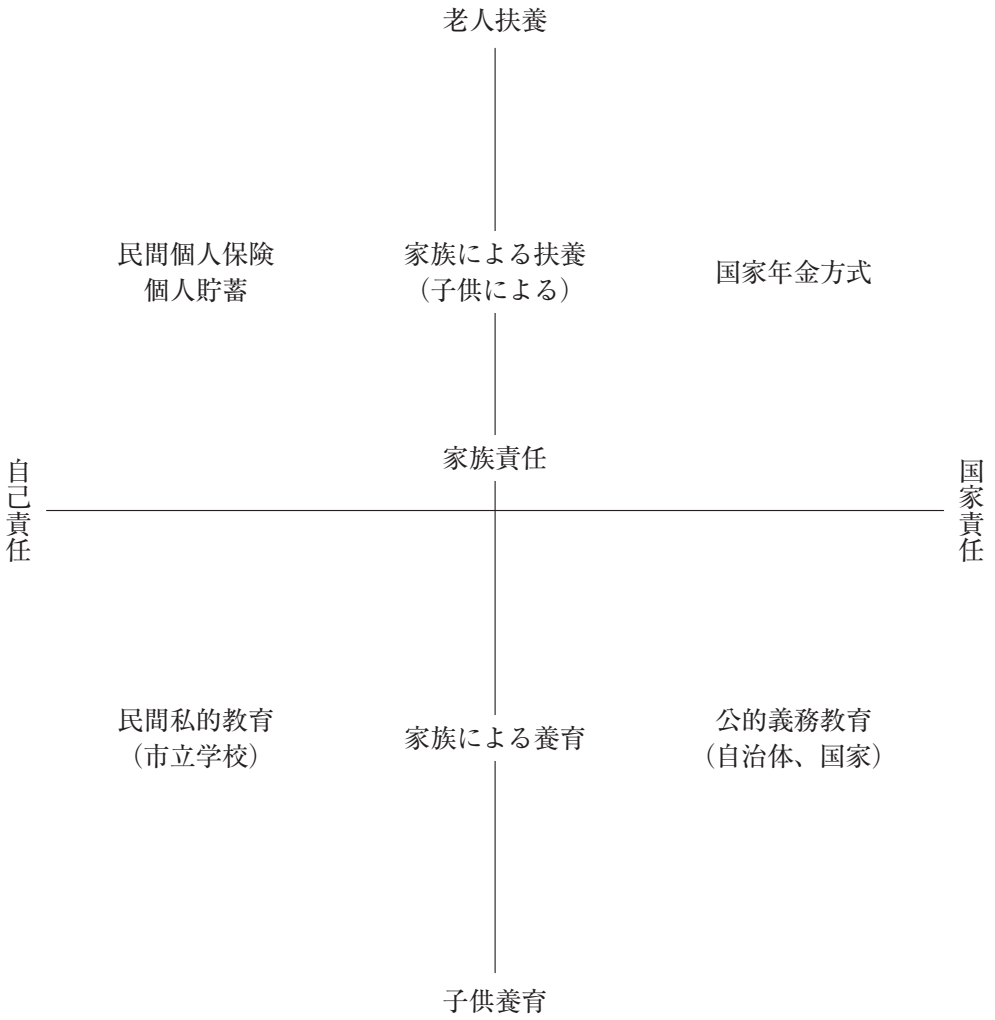
しかし、産みたいのに条件が整わないから産めないという人々に、まわりが条件を整えることは必要であろう。そのとき、方法は二つあろう。

①動機の側面の強化――子供が欲しいという強烈な欲求を抱くようにする。

②養育の条件の強化――養育費用、時間の確保を図る制度を整える。

現代の議論と提案は、動機づけの面を軽く見ているのではないのか。これには、**家族と家系の連続というものの価値を高く評価するような文化と教育を重視すべき**である。スエーデンあ

子供養育と老人扶養



（注）現代は、老人扶養について、個人・家族責任原則を軽くし、国家責任の年金方式が重視されるが、自分の老後は自分の子供に見てもらう、子供は自分の親を看る、という原則を放棄すると、老後生活の維持と子供養育というものが、動機づけにおいて結び付かなくなり、子供を苦労して育てる、その老後にその喜びを味わうといういのちの循環的連環を断ち切ることになる。もちろん、個人の責任、家族の責任といっても限度があるが、個人と家族の役割を、老人扶養と子供養育に結び付ける精神と仕組みとを再創造すべきであろう。この点を無視する国家依存方式は、必ず破綻するであろう。

たりでは、この点を無視して、子供が生まれたとき、その父親を登録しなくてもよいという方式も提案されているが、それは好ましい行き方ではあるまい。

少子化を克服する上で養育条件の改善は不可欠であるが、子供は親の老後を看(み)るという文化を回復すべきであろう。

また、親たる者も、子供に孫が生まれて代々子孫繁栄となるように支援するという自覚を持つべきであろう。そうすることによって、子供の出生と老人の扶養とが結びつけられる。人類の歴史は、長い間このような文化を保持してきたのである。

そして、家系を大切にするということは、代々にわたる家族のつながりを大切にすることであり、過去の家系を誇ったり他をけなしたりすることではなく、**未来へと子孫を繁栄させること**である。この点を取り違えてはならぬ。

人類は、個人責任と、家族責任と、会社・地域・国家社会による集団責任と、この三つを適度に組み合わせる方式を工夫するしかない。いのちの生存には、いつも個人、家族、集団という三重の在り方を重ね合わせるのが、妥当な行き方なのであろう。しかも、なによりまず自己自身で、次に家族で、最後に組織、地域、国家社会で、という補完性の原理を忘れないことである。

地球社会では、老人扶養や子供の養育までも一方で伝統的な家族を崩壊させ、売り買い方式で物事を扱うようであるが、かえって段々と売り買いだけでもって事は済まなくなるのではないか。

グローバル化ということは、遠くに住む多くの人が互いに隣人となり合うことである。

結局、人類は、死ぬまで、個人独立主義と相互扶助主義との結合を逃れることはできない。歴史は、人類のいのちの永続的な再生産であるから、そのようないのちの支え合いの事実を物語るのではないか。

＊編集者註

本稿は故永安幸正教授（二〇〇七年九月三日逝去）が二〇〇五年にまとめた、全十二章におよぶ歴史論の一部である。文中の現在存在しないURLや誤表記と思われる表現に関しては、原文を尊重し修正を加えず適宜「ママ」というルビを施した。生前より各章ごとに掲載してきたが、本稿は、その第三章である。以下、全体の章立てと合わせて、掲載号及び発行年月日を記す。（未刊は太字で示した。第六章・第十二章・おわりに・謝辞に関しては、順次掲載予定である。）

はじめに
……第五四号／二〇〇四・九・三〇
いのち史観とエコロジーの叡智（第一章）
……第五四号／二〇〇四・九・三〇
歴史には、素・真・心の三実がある（第二章）
……第五四号／二〇〇四・九・三〇
歴史は、いのちの反発と和合によって動く（第三章）
……第七四号／二〇一五・二・一〇
歴史には、価値の相対主義と絶対主義がある（第四章）
……第五六号／二〇〇五・九・三〇
歴史には、神話という心実が不可欠である（第五章）
……第五七号／二〇〇六・二・二八
歴史から、人生心理学を学ぶ（第六章）
歴史には、国家盛衰の因果律が現れる（第七章）
……第五八号／二〇〇六・九・三〇
歴史は、国際間の相互理解を促進するか（第八章前半）
……第五九号／二〇〇七・二・二八
歴史は、国際間の相互理解を促進するか（第八章後半）
……第六〇号／二〇〇七・九・三〇
歴史は、民族の魂が創造する（第九章）
……第六三号／二〇〇九・二・二八
歴史は、いのち共同体のたえざる再構築なり（第十章前半）
……第六五号／二〇一〇・三・三一
歴史は、いのち共同体のたえざる再構築なり（第十章後半）
……第六六号／二〇一〇・九・三〇
歴史において、大義にいのちを捧げるとは（第十一章）
……第七二号／二〇一四・三・一〇
歴史は、永遠のいのちを目指す（第十二章）
おわりに
謝辞